

# 市民文化財研究員活動報告書 19

2015. 3

仙台市教育委員会

仙台市富沢遺跡保存館

## はじめに

地底の森ミュージアムが開館して18年が過ぎ、これまで74万人を超える方々のご来館を頂きました。これも皆様方のご厚情の賜物と感謝申し上げます。

当館では、学校教育活動との緊密な連携を図るとともに、市民の生涯学習を支援するため、各種体験教室・講座を開催しております。また、その一環として遺跡や考古学について深く学びたい、そうした意欲を持った方々の自主的な学習を支援するために、市民文化財研究員育成という特色ある事業を行ってまいりました。これまで、17期131名が市民文化財研究員の研修を修了し、多くの方々が当館のボランティアとして様々な活動を行っております。

今年度、第18期市民文化財研究員10名が、それぞれのテーマに沿った活動を行い、そのうち8名の方々が活動成果として本書で報告しました。これからの研究員の活動に期待するとともに、今後とも皆様方のご指導・ご支援をお願い申し上げます。

平成27年3月

仙台市教育委員会  
教育長 上田 昌孝  
仙台市富沢遺跡保存館  
館長 金森 安孝

# 目 次

## I 市民の自主的な生涯学習活動への支援

## II 市民文化財研究員とその活動

## III 活動支援概要

## IV 活動報告

縄文のスタイル考	伊藤仁幾	8
仙台平野北部の弥生時代中期の遺跡の消長を 杳形遺跡を通して考える	菊田良次	10
縄文時代の音楽		
—縄文の森広場「縄文のまつり復元と創造プロジェクト」に参加して—	熊谷美恵子	22
東日本大震災復興事業と発掘調査の連携について	小林 信行	26
秋保温泉郷の縄文遺跡を探る	佐藤 紳	32
是川中居遺跡にみる縄文琴とその再現について	西村尚純	46
弥生時代のコメづくりについて		
—仙台平野の水田遺構から考える—	沼倉哲郎	58
カミサマを探して	古河佳子	42

# 例 言

1. 本書は平成26年度市民文化財研究員活動報告書である。
2. 本書の執筆は、IVの各活動報告を市民文化財研究員がそれぞれ行い、そのほかは仙台市富沢遺跡保存館が行った。
3. 報告書作成に際して、参考にした文献や資料は参考文献として記載したが、紙数の関係でその全てを記載していないものもある。

# I. 市民の自主的な生涯学習活動への支援

## 1. 基本構想における位置づけ

地底の森ミュージアムの建設は、1988年の富沢遺跡第30次調査における2万年前の森の跡と旧石器人のキャンプ跡の発見を契機としている。それは、この調査成果の重要性から、仙台市が調査対象地区の保存を決定し、その活用を図るために、翌年、基本構想策定委員会を設け、策定された構想において「考古系総合博物館」の建設がうたわれたことに始まる。この構想では、博物館の様々な活動の中で、生涯学習活動の基本方針の一つとして、「市民が、文化財に関するさまざまな情報にふれ、興味や関心に応じて自らのテーマを追求できるようにする」とし、「市民の考古学教室」などを通して、自主的な活動を支援する方法が考えられていた。これは、文化財、特に埋蔵文化財について、その大切さを知ってもらうために、それまで行われてきた発掘調査の現地説明会や考古学に関するさまざまな講座、講演会、展示会などとともに、より積極的な方法を推進していくことを示したものであった。

## 2. 生涯学習活動と市民文化財研究員

地底の森ミュージアムでは、生涯学習活動として、来館者に自由に参加してもらう富沢講座、石器を使ってみようコーナー、参加者を公募する旧石器体験教室、親子体験教室、考古学講座などを行っている。こうした活動の参加者には、新たな興味をもったり、もっと遺跡や考古学を知りたいと思う市民がいて、専門的な質問を受けることもある。また、一般の来館者についても、その関心は富沢遺跡だけではなく、地域や時代を越えていることを認識させられる。

こうしたこともあり、基本構想にもうたわれていた市民の自主的な活動の支援をどのように行っていくかが開館を前後するなかで検討された。施設面では館内に専用のスペースはなく、また、研修室の利用や、利用日の工夫、支援する市民の数など、制約は多かったが、平成8年度に第1期の「市民文化財研究員」15名を募集し始め、平成25年度まで17期にわたって合計131名の活動成果を『市民文化財研究員活動報告書1～18』として刊行してきた。平成20年度からは報告書をHPで公開している。

平成26年度は、新たに10名の第18期市民文化財研究員の応募があり、それぞれのテーマに沿って自主的に活動を行ってきた。

## Ⅱ. 市民文化財研究員とその活動

### 1. 目的

考古学や遺跡に興味をもっている市民が、地底の森ミュージアムを核として、その支援を受けながら、自主的にそれぞれのテーマを学び、歴史や文化をより身近なものにすることを目的としている。

### 2. 活動期間

各年度ごとの1年間とする。定員は15名（今期は平成26年4月8日～平成27年3月25日）

### 3. 支援の内容

#### （1） 研究場所の提供

地底の森ミュージアム1階研修室の開放。

#### （2） 研究の補助および研究方法についての相談受付

学芸員による考古学についての講義。

学芸員による個人ごとの対応。

#### （3） 収蔵図書の利用

室内での閲覧。必要箇所の複写については有料。

#### （4） 市民文化財研究員証の発行

登録日あるいは相談があるときは、これを提示し入館。

### 4. 活動内容

#### （1） 毎週水曜日午前2時間の学習（地底の森ミュージアム1階研修室）

登録日（館員1名が在室）

#### （2） 年1～2回開催する見学会での学習（遺跡や博物館施設の見学）

#### （3） 活動報告書の刊行

#### （4） その他

①館内では、市民文化財研究員証をネームプレートとして付ける。

②登録日が休館日にあたった場合は学習を休みとし、翌日に順延しない。

③研修室が使えない場合があるため、事前に予定表を配布して周知する。

### Ⅲ. 活動支援概要

#### 1. 概要

研究員はそれぞれのテーマで館内外で活動を行った。それについては活動報告に述べられている。ここでは館での支援活動の概要を総括する。

平成26年4月～6月	登録日学習の開催日	学習のための研修室開放
7月～9月	自主学習期間	
9月～12月	登録日学習の開催日	学習のための研修室開放 活動報告書執筆のための相談
平成27年1月～3月	登録日学習の開催日	学習のための研修室開放 活動報告書執筆のための相談

#### 2. 第18期市民文化財研究員修了者（五十音順）

伊藤仁幾 菊田良次 熊谷美恵子 小林信行 佐藤紳 西村尚純 沼倉哲郎  
古河佳子

#### 3. 週1回の半日単位の学習

今年度は、週1回の登録日を、水曜日の午前に設け活動を行った。

#### 4. 登録日学習内容の概要

平成26年4月8日	オリエンテーション
6月19日	博物館・遺跡見学（多賀城跡など）
11月11日	ボランティア・市民文化財研究員研修旅行
平成27年2月18日	活動報告原稿提出
3月25日	研修旅行・修了式

#### 5. 研修会・研修旅行

今年度の研修旅行は、平成26年11月11日に福島県柳津町やないづ縄文館などを地底の森ミュージアムおよび縄文の森広場のボランティアと合同で見学した。平成27年3月25日には、七ヶ浜町歴史資料館・国指定史跡大木囲貝塚を見学した。

年	月日	活動内容	出席
2014年	4月9日	オリエンテーション	10
	4月23日	博物館見学	8
	5月14日	旧石器時代概説	7
	5月21日	縄文時代概説	8
	5月28日	遺跡見学（三神峯遺跡）	10
	6月4日	弥生時代概説	7
	6月18日	古墳時代概説	9
	6月24日	古代～近世概説	8
	7～9月	夏休み・自主活動期間	
	10月1日	個別（希望）テーマ講義	8
	10月8日	遺跡見学（名取市雷神山古墳・飯野坂古墳群）	8
	10月15日	個別（希望）テーマ講義	8
	10月22日	個別（希望）テーマ講義	8
	10月29日	個別（希望）テーマ講義	6
2015年	11月12日	個別（希望）テーマ講義	6
	11月19日	個別（希望）テーマ講義	7
	12月10日	個別（希望）テーマ講義	7
	12月17日	個別（希望）テーマ講義	2
	2月18日	レポート提出期限	6
	2月25日	レポート校正作業・テーマ講義	7
	3月11日	レポート校正作業	6
2015年	3月18日	レポート校正作業	7
	3月25日	遺跡見学・修了式	7



活動の様子

## IV. 活動報告

考古学あるいは遺跡について、研究員それぞれのテーマで行った活動成果をまとめた。第18期市民文化財研究員は、平成26年2・3月の募集で、実際の活動は4月からであった。

それぞれの活動をみても、縄文の森広場でのボランティア活動を通して興味をもったことに取り組んだり、活動当初から具体的なレポート作成にむけた動きをするなど、積極的な傾向がみられた。その中で、博物館や遺跡を実際に訪れ、そこで体験して感じたことや疑問に思ったことをそれぞれのテーマとして決定した傾向がある。それぞれが決定したテーマについては、文献を調べるなど、様々な調査を行って、自身が設定した問題と向き合っていた。

こうした研究員の活動は、それぞれのペースを大切にしている。また、個人的な事情で活動をつづけられなくなった方もいた。そのため、今回は8名の活動を報告することにした。

# 縄文のスタイル考

伊藤仁幾

## 1. はじめに

縄文人はどのような服装をしていたか？  
このようなテーマに関心がわき調べてみることにした。

縄文時代も現代社会においても生活に最低限必要なものは「衣・食・住」であるが、縄文期の住居や食べ物に関しては遺物の出土例が多数あることで、相当な知見が示されている。一方、「衣」は「食・住」に比較した場合に解明が進んでいるとは言い難い。

当然ながら衣服の出土例がないからである。これは、日本の多くが酸性土壌の上、高温多湿の気候であり、衣服に使用されたとあろう毛皮とか植物素材のほとんどが何千年という長い年月の間に朽ち果ててしまったのは当然のことと思う。

一方、土偶の文様や土器の圧痕跡、更に多くはないものの出土例のある植物性の繊維などから考察した場合、縄文人が防寒あるいは肉体保護の面から現代の衣服に通じるものを衣服を身に着けていたであろうことは明白である。

そこで、縄文人がどのような衣服を身に着けていたのか、様々な資料を参考に考察を試みたい。

## 2. 成果

### 衣服へのアプローチ

縄文時代は今よりおよそ 13,000 年前に始まり、以後の 10,000 年程度をさしている。この超長期間を考古学では、草創期から晩期の 6 期に分け、それぞれの時代背景や生活様式などの特徴で時代区分を行っている。

本稿の衣服を考察するにあたっては、以下の理由により縄文時代の中期（4,300 年前）

に焦点を絞った。

1. 草創期から晩期までの間では変容大きすぎる
2. 時代を特定した方が、衣服の比較、考察が容易になりうる
3. 縄文中期は現在の気候と大差なく、当時の衣服の考察が容易なこと（安田 2004）

縄文中期の時代に相当する遺物を、日本のみならず世界的に見れば衣服のヒントとなりうるものが散見できる。

ミイラ・・・エジプトでは 5,100 年以上前に初期王国が築かれ、すでにミイラが作られ



**『縄文の女神』のデータ**

出土地	山形県最上郡舟形町舟形字西ノ前 西ノ前遺跡(集落跡)
年代	縄文時代中期(約4,500年前)
高さ	45cm
重さ	3.155kg(復元重量)

**国指定重要文化財(平成10年)指定  
国宝(平成24年)指定**

**海外での出展歴**

平成10年	パリ「縄文」展
平成12年	上海「日本文物精華」展
平成16年	ドイツ「日本の考古 - 曙光の時代 -」
平成21年	イギリス 大英博物館「土偶展」

第1図 国宝「縄文の女神」



第2図 復元された衣服（左:アイスマン、右:縄文人）  
（コンラート1994、学習研究社1996）

ていたほか、ヨーロッパアルプスのアイスマン（5300年前）などを参考。

レリーフ・・・エジプトや古代ギリシアには独特な文化が生まれ、石像やレリーフが作られた。

はにわ・・・日本で出土したもの。国宝「縄文の女神」は4,500年前の土偶であり、青森県三内丸山遺跡出土の板状土偶は縄文中期とみられている。

これら、出土例から見た限りでは、単なる防寒や身体の保護にとどまることなく、一定の装飾も施された衣服が定着しているように思われる。

## 衣服の素材

縄文中期の日本の人口は、26万人程度と想定されている（鬼頭2007）。

一方、当時の人々が食料とした野生動物は人間の比ではなく、多種多数の生息数があったのである。

当然、獲物の獣皮が衣服として利用されていたことは、すでに述べたアイスマンの存在で明らかである。特に獣皮は防寒や、肉体保護の観点で大いに利用されたと思われる。

また、多くの出土例のある編布（あんぎん）で作られた上着やズボンは、博物館や歴史書のイラストなどで紹介されているようにごく普通に着用されていたものと思われる。

そのほかにも、出土例のない素材（分解されて残っていない）があることも否定できない。現代のシルクやウールに近い素材もあればあったかもしれない。今後の研究の成果を待ちたい。

## 3. おわりに

今から5000年前を語ることは、われわれにとっては、大変な作業であることをつくづく知らされた。多くの学者や知識人や専門家がいろいろな手掛かりを求めて、未知の世界を切り開いていることに敬意を払いたい。

今後とも自分なりに関心を持ち続け、切磋琢磨していろいろな知識を吸収したいと思っている。

## 参考文献

- 学習研究社1996『古代史発見シリーズ2 くつがえされた縄文の常識 謎の東北王国・三内丸山遺跡』  
鬼頭 宏2007「人口の超長期推移」『図説 人口でみる日本史』PHP 研究所  
コンラート・シュピンドラー（畔上司訳）1994『5000年前の男 解明された凍結ミイラの謎』文藝春秋  
安田喜憲2004『気候変動の文明史』NTT出版

# 仙台平野北部の弥生時代中期の遺跡の消長を杓形遺跡を通して考える

菊田良次

## 1. はじめに

2011年の震災後、南三陸町志津川から着の身着のまま仙台に移り住んでから3年、市民文化財研究員の募集を知り、考古学の基礎的な知識もないまま活動に参加した。

活動のテーマを考える際に、津波にこだわったテーマにしようという思いは強くあった。テーマ設定で悩んでいる時に、古津波が仙台平野に襲来したという内容の仙台市教委主催「発掘された仙台」第60回文化財展を

知り見学に行った。弥生時代中期に襲来した津波は、今回の巨大津波と同規模かそれ以上の津波で、その後400年間も遺跡は廃絶したことを知った。多くの遺跡が姿を消したことに、自分をすり合わせる思いを持った。

古津波では、生き残った人はそれまで住んでいた地域には戻らず、津波の来ない高台へ移動し、他の集落の中にとけ込んだか、または、新たな集落や水田をつくったか、いずれにせよ現代に通じるものがあるという印象を

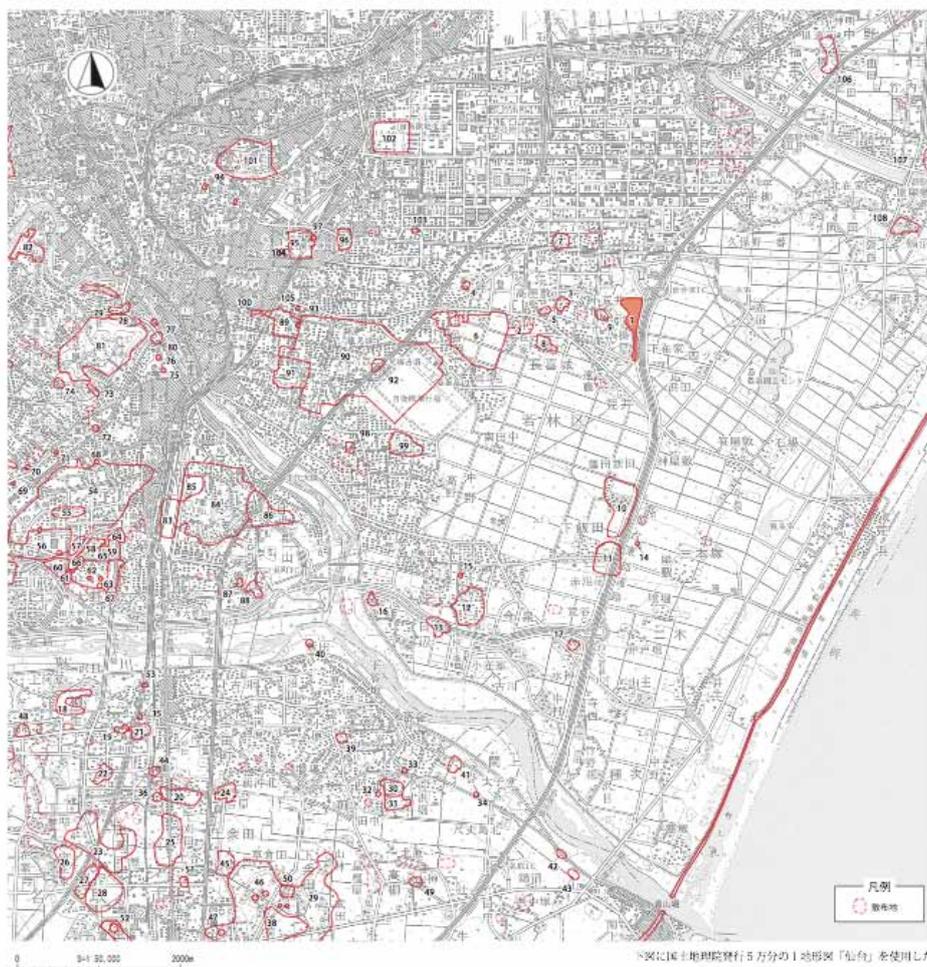
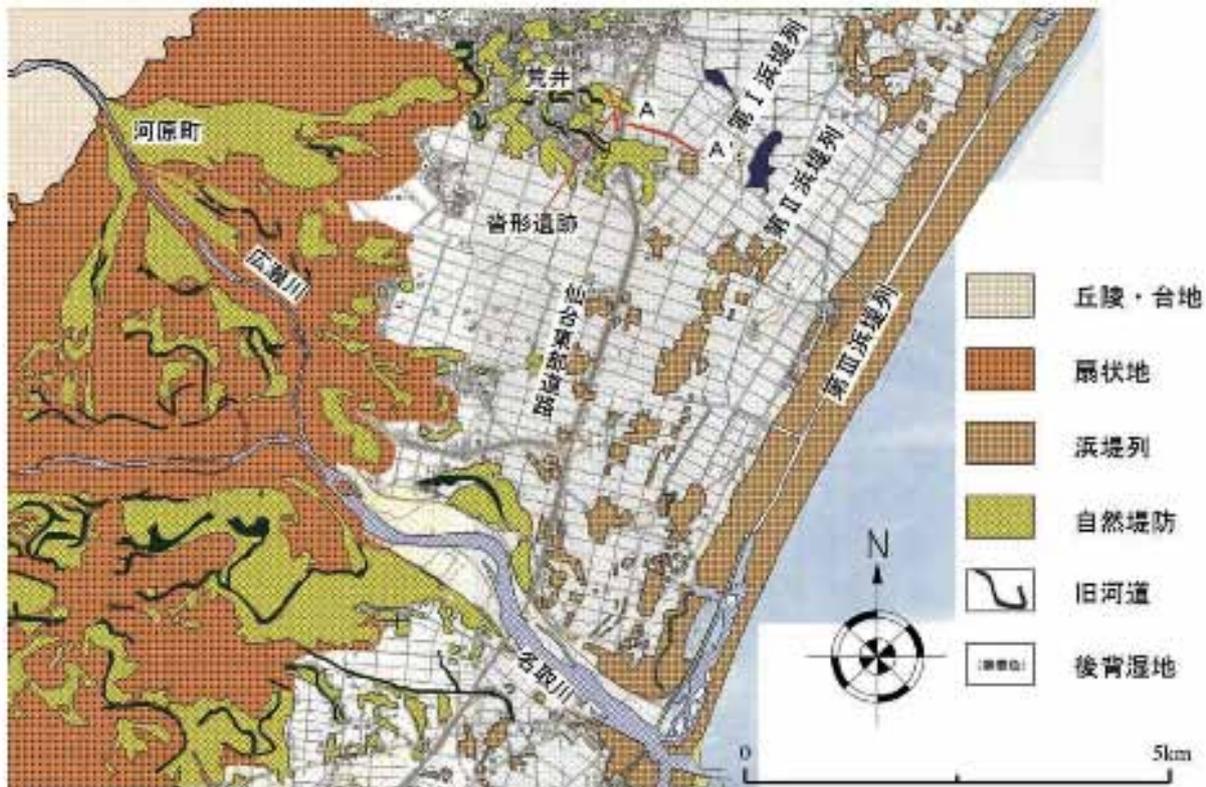


図1 対象となる遺跡

- |          |          |          |           |
|----------|----------|----------|-----------|
| 1 杓形遺跡   | 2 中在家南遺跡 | 3 押口遺跡   | 10 藤田新田遺跡 |
| 11 下飯田遺跡 | 12 今泉遺跡  | 13 高田B遺跡 |           |



第2図 仙台平野沓形遺跡周辺の地形分類図  
 下図に国土地理院発行2万5千の1地形図「仙台東南部」を使用した

表1 仙台平野の七北田川・名取川間における弥生時代の遺跡の消長

グループ	遺跡名	I	II	III	IV	備考
1G	藤田新田遺跡	0.7km～ 1km	1m	弥生時代中期	古墳時代前期	弥生時代の溝跡検出
	不明			古墳時代前期	弥生土器2点 縄文土器3点出土	
2G	今泉遺跡	2.5km	3.5m前後	弥生時代中期	古墳時代前期	弥生時代中期の土器棺墓
	弥生時代中期			古墳時代前期	縄文時代遺物検出	
3G	沓形遺跡	2.5km	2～5m	弥生時代中期	古墳時代前期	弥生時代中期水田跡直上から津波堆積物砂層発見
	押口遺跡	3km		弥生時代中期	古墳時代前期	弥生時代後期天王山式の土器1点出土
	中在家南遺跡	3.3km※		弥生時代中期	古墳時代前期	弥生時代後期天王山式の土器数点出土

[補足]

I 当時の海岸線である第Ⅱ浜堤列から遺跡までの距離 ※仙台市文化財調査報告書213集第1分冊第6部中在家南遺跡調査報告では「2.0～2.5km」と記載。ここでは、国土地理院発行2万5千分の1の地図より測定したものを記載した。

II 弥生時代の遺跡の標高

III 遺跡の廃絶時期

IV 遺跡の再開時期

強く持った。現代では、被災地にとどまり町の再建をめざすが、住まいは元の場所ではなく高台に移転する、弥生時代には集落を打ち捨てて他所へ移転するという事を考えると、時代は違っても、津波への「恐れ」の感情はあまり違ってないことに気づいた。

このようなことから、弥生時代中期の遺跡が、津波によって消え、古墳時代になるまで打ち捨てられていたということについて調べてみようと考えた。

## 2 弥生時代中期の津波痕跡と遺跡の消長調査

そのような時に目にとまったのが、古津波など自然災害による社会変動を論じた考古学分野からの研究だった。最も関心を持ったのは、仙台市教育委員会齋野裕彦氏の労作である(齋野 2012)。仙台平野の名取川流域から七北田川流域に至るまでを三地域に分け、弥生時代中期の巨大津波の浸水域を地帯Ⅲ(自然堤防地域、浜堤列形成範囲)とし、地帯Ⅲと地帯Ⅰ(丘陵・段丘)、地帯Ⅱ(扇状地)との遺物・遺構の出土・検出量の多寡によって集落動態の変化を考察している。それによれば、地帯Ⅲは弥生時代の巨大津波以降古墳時代に至るまで、遺物・遺構が全く発見されていないが、古墳時代になると積極的に当地での活動を開始したという変化が見られる、その変化の要因として、弥生時代人は「心理的な津波被害による自然観の変更」によって地帯Ⅲへの復帰に消極的であり、古墳時代人は、「水田稲作適地の生産性を重視した資源観」によって集落を地帯Ⅲに積極的に展開していったと述べている。

これらの捉え方をできるだけ参考にしようと考え、仙台平野名取川以北～仙台市荒井地区までにあった、弥生時代中期の遺跡(図1・2)の消長を以下の2点について調査し検討することにした。

① 弥生時代中期に多くの遺跡が断絶してい

るのは津波が原因である。

② 遺跡断絶後、農地拡大の動きは古墳時代よりも以前に始まった。

### (1) 対象遺跡について

対象とする範囲は、名取川以北～仙台市荒井地区まで、そして当時の海岸線である第Ⅱ浜堤列からおおよそ4 km 内陸の範囲とした(図1・2)。対象遺跡を表1に示した。第1グループは藤田新田遺跡と下飯田遺跡。ただし、下飯田遺跡は弥生遺跡ではないかもしれない(以下、1Gと言う)。第2グループは、今泉遺跡と高田B遺跡(以下、2G)。第3グループは、杓形遺跡、押口遺跡、中在家南遺跡(以下、3G)の7遺跡とする。

グループ分けの基準は、図1でわかる通り隣の遺跡までの距離が約200mの範囲内にある遺跡を同一グループとして、一括りにした。例えば、藤田新田遺跡と下飯田遺跡との距離は200mほどで、他の遺跡もだいたい200mほどの範囲内である。ただし、杓形遺跡は押口遺跡とは600～700mほど、中在家南遺跡とは約1kmの距離にあるが、一括りにした。おそらく、日常生活では採集・狩猟や土器・生産用具作りなどの労働は集落単位で行われることもあろうが、漁労や米作りなど大掛かりな労働は、このグループを基礎として行われていたのではないかと考え、このようなグループ分けをした。

### (2) 津波の痕跡

3.11 震災では、巨大津波の最終到達点付近の大小河川や山間部の沢には、おびただしい瓦礫など残骸が残された。海岸に近づくほど表土や山肌が剥ぎ取られ岩盤がむき出しになり、もとの地形を変えたことや海岸線の地形が変わったことも目にした。

このように、巨大津波では海岸線に近づくほど地表にその痕跡は残るが、海岸からはなれた地域では地表には痕跡は認められなかった。海岸から地図上直線で約2 km 付近にある南三陸町入谷大船沢の農家は、1階が津波

で破壊され2階にまで浸水した。農地には夥しい瓦礫が残ったが、畑地や水田の畦など地表の破壊には気づかなかったと言う。今回の震災の経験から、各グループの遺跡に残された津波の痕跡を上記の視点、つまり①海岸に近づくほど地表や地形が破壊される等の痕跡が残る、②軽量なものほど陸側に分布し、かつ河川に残される、から見ていくことにする。なお、3Gの杓形遺跡はこの項の冒頭で取り上げ、以下1Gから順に述べる。

#### 1) 杓形遺跡の津波痕跡について

杓形遺跡(図1)は、弥生時代中期の遺跡である。本遺跡で弥生時代中期中葉の水田跡「6a1層」の直上から白い中粒砂層「5b層」が発見された(図3)。それは数センチメートルと薄く、淘汰度が良好な海浜起源の砂層で、その分布は海岸線から西に向かっていることから、津波由来の堆積物と認定された(仙台市教委2010)。

松本秀明氏らは2011年の4月以降2回

にわたり、3.11巨大津波の津波堆積物の分布状態を調査した(松本他2013)。それによれば、砂質堆積層が連続して分布する範囲は、海岸線から津波遡上限界までの距離の約60%であった。それを弥生時代の津波にあてはめると、杓形遺跡の調査から砂質堆積層の分布限界は当時の海岸線第Ⅱ浜堤列の位置から2.5kmであるから、津波遡上距離は当時の海岸線から約4.2kmと推測できると述べている。なお、3.11震災時の巨大津波の遡上距離は、仙台平野では約4.0kmとされている。

杓形遺跡は、畦畔や水田面の津波による破壊痕跡は認められなかったようである。

#### 2) 1Gの津波痕跡

1Gは第Ⅰ浜堤列上にあり、そこは今から約5000~4500年前に形成されたと言われている。

藤田新田遺跡は河川跡から弥生土器が4点出土していて、そのうち1点は弥生時代中期



図3 杓形遺跡第1次調査6a1層水田跡水田区画確認状況(白っぽい層が5b層)  
(斎野2012より)

中葉のものである。また、米作りに使用された石器の出土や弥生時代のものと思われる溝跡も検出されている（宮城県教委 1994）。下飯田遺跡からは縄文土器3点と弥生土器2点が出土している（仙台市教委 1995）。

1Gの地域は標高1m前後であり、東側は700～1000mで海岸（第Ⅱ浜堤列）に至り、また西側は後背湿地で、東側西側とも普段から海水の影響を受けやすい地域であったようである。比較的小高い場所にはナラ林が、乾燥している場所にはヨモギ、湿地帯にはヨシ原が広がり、水辺にはキンギョモが生育していたようだ（仙台市教委 1995）。

このように海岸に近いことと津波を遮るものがないことから、1Gは巨大津波では恐らく住民は1人も生き残らなかったし、住居や生活用具・生産道具・漁具も根こそぎ破壊流失してしまったと考えた。しかも、水田畦畔

等も破壊されてしまい、後の人の耕作による攪乱も加わり、遺構のほとんどは破壊消失し、わずかに溝跡だけが残ったものと推測した。

住居遺構の消失に関して、弥生時代の集落は5棟が単位とされており（佐原・都出 2000）、藤田新田遺跡においても5棟以上の住居の存在が予想される。仙台平野においては、竪穴住居跡の検出例が少ないことや、扉材と梯子材の出土から、当時の住まいとして高床式住居が考慮されている（仙台市教委 1996）。このことから、藤田新田遺跡にあった集落の住居が高床式であった場合には、巨大津波襲来により全て消失し、遺構としても残らないのである。

### 3) 2Gの津波痕跡

2Gは、標高3.5m前後で当時の海岸線である第Ⅱ浜堤列より、2.5kmほどの陸側に位置し、名取川や広瀬側に通じる旧河川によ

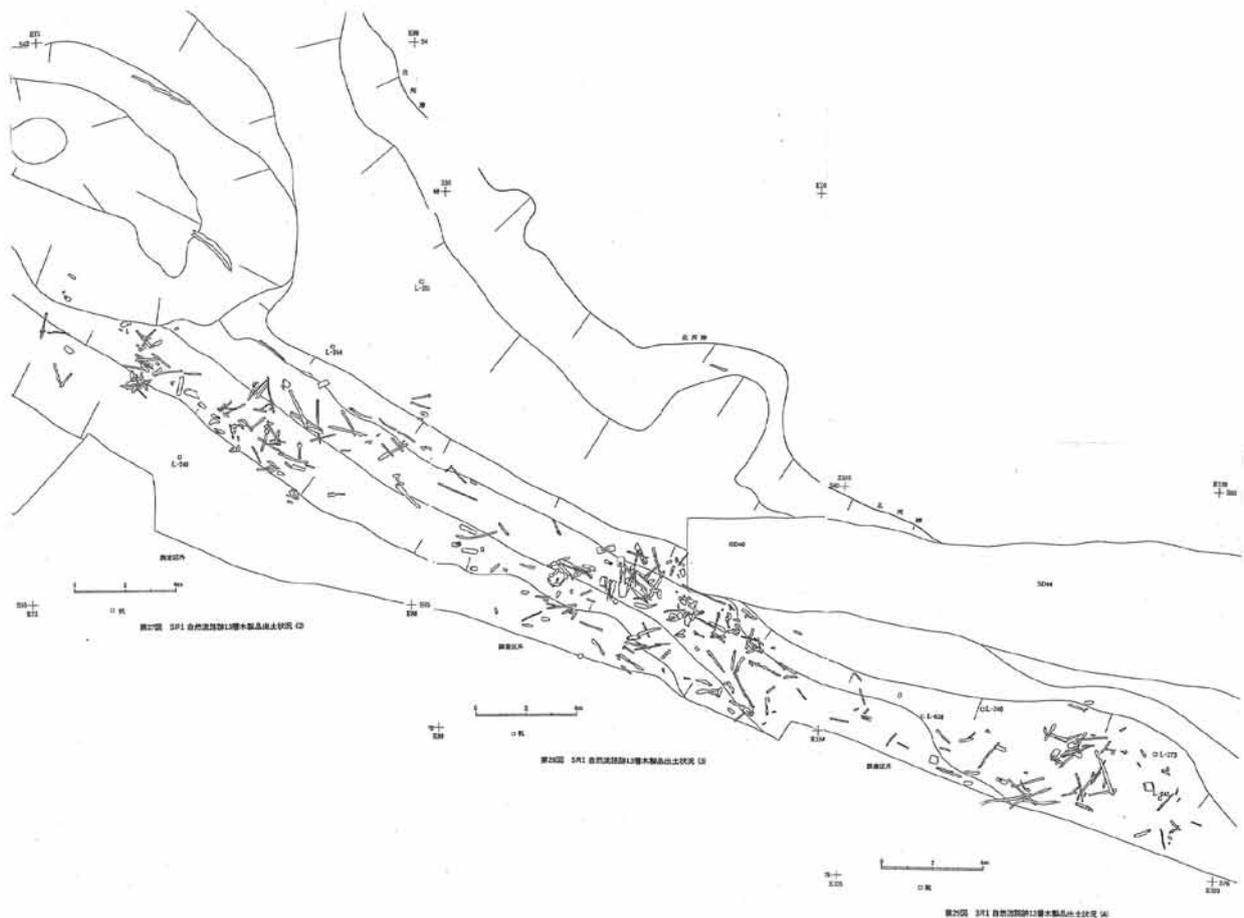


図4 SR1 自然流路跡13層木製品出土状況

って形成された自然堤防上にある。

今泉遺跡から、弥生時代中期の土器棺墓5基が発見されている（仙台市教委1994）。高田B遺跡は、縄文時代後期中葉の竪穴住居1基が発見され、縄文時代から断続していた遺跡である（仙台市教委2000）。

図4は、弥生時代中期中葉に流れていた高田B遺跡旧河川跡SR1（13層）の木製品出土状況を表した図である。川幅は最大19m～26m、最深部の川底の幅は2mほどで、その2m内外の川底に集中して、大量の木製品や自然木・植物遺存体が発見された。

この木製品等の出土状況と、今回の震災時の廃材等の残存状況とを比較検討した。

図5は、3.11震災時の南三陸町志津川磯の沢地内を流れている新井田川上流に残されていた、家屋破壊によって生じた木材破片の残存状況である。この川の地点は、海岸からおよそ2km内陸で、標高は約10mほどで

ある。普段の水量は少ない。そこでは川の中央に木材が集中し、その長軸の多くが下流方向を向いている。また、筆者は3.11震災時に津波遡上限界の山際や、また河川では、遡上するのを橋に遮られた大量の木材が、橋の下流側にうずたかく積まれて残っている現場を目の当たりにした。

図4において、大量の木製品等が川底に集中するように残ったのは、津波が退く時に比較的重量のある石器等を南斜面に大量に残し、“引き波”に引き込まれるように、木製品や引き抜かれたり折れたりした自然木や植物は、川底に集中し、下流（図4では東方向）に流されず残ったものと推測した。このように筆者は、3.11震災時の経験から、旧河川（SR1）13層から出土した木製品等の出土状況は、津波痕跡であると直感的に推測した。

以上の直感による津波痕跡の推測に対して、次のような異論が予想される。第1は、



図5 南三陸町志津川磯の沢 新井田川上流 2011年3月16日 菊田撮影  
海岸より2km付近 標高10mほど 右手前は国道45号の歩道ガードレール

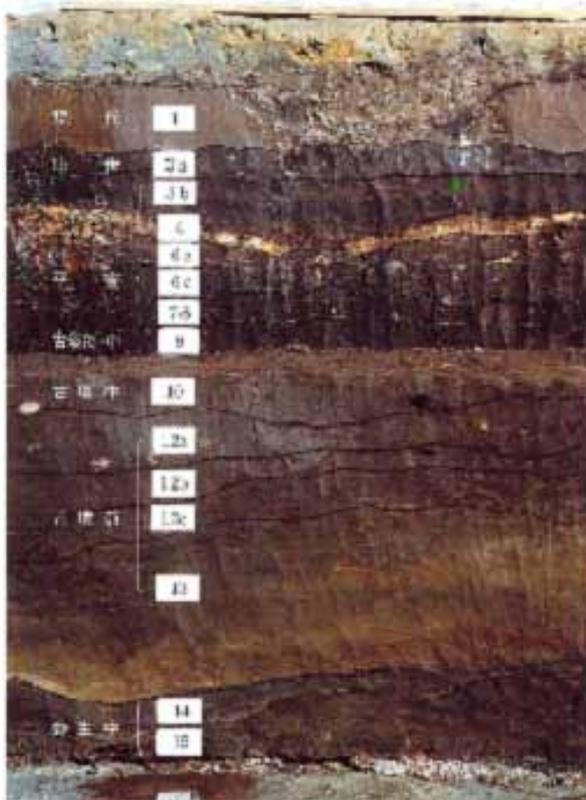


図6 押口遺跡 南区河川跡堆積土層断面（北壁）

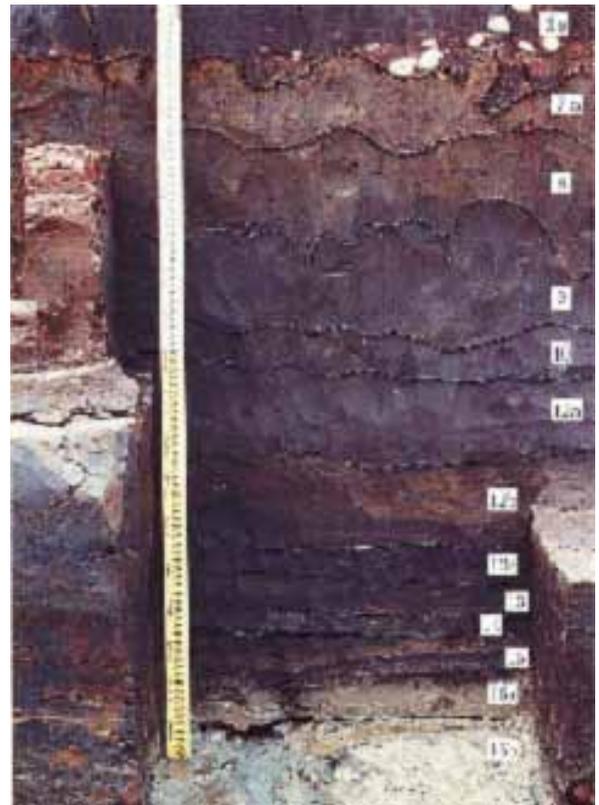


図7 中在家南遺跡 第4次調査区河川跡土層断面（北壁）

仙台平野は沖積平野であり、津波による木製品等の残り方は、リアス海岸地帯とは“引き波”の速度が全く違うので、根本的に異なり比較できない。第2は、当時は木製品の未成品を加工上「水漬け」と「乾燥」とを繰り返したが（仙台市教委 1996）、旧河川 SR1 で発見された大量の木製品はこの「水漬け」をしている状況を示しているので、津波の痕跡とはいえない。

第1の問題に関しては、確かに「引き波」の速度は沖積平野である仙台平野よりもリアス海岸地形の方が速い。しかし、旧河川 SR1 で発見された木製品と 3.11 震災時に残された廃材の残され方とは間違いなく近似しているのである。

第2の「水漬け」に関しては、未成品以外の木製品や植物遺存体が大量に同時に出土していることや、またそれらが残されている範囲が広いことから、旧河川 SR 1 の木製品残存状況を「水漬け」と推定できない。

以上より、3.11 巨大津波を直近で体験した立場からいうと、旧河川 SR 1 木製品残存状況を津波の痕跡と推測することは否定できないのである。

#### 4) 3G の津波痕跡

3G の地域は、杓形遺跡等を除けば当時の海岸より 3 km ほどの距離にあり、津波堆積層は中粒砂層でなく、粘土層と砂層との混合か粘土層でないかと考える。

南三陸町志津川での 3.11 震災では、海岸から約 500 m にある高度 5.6 m の山の中腹標高 10～20 m にある住宅地内の駐車場にヘドロが堆積していた。その山際にある標高が約 2.5 m の拙宅庭には、比較的粒子の大きい砂が大量に堆積していた。このことからリアス海岸のような地形の場所では、泥は標高の高い地域に堆積し、比較的重量のある砂は平地に堆積すると考えた。このことは、砂よりも泥の方が浸水域の海側から遠方に分布することを示している。

ここでは、中在家南遺跡と押口遺跡を取り上げ、津波痕跡と思われる地層を探しながら検討する。

### ① 押口遺跡

図6は押口遺跡南区（現在地はヤマザワ荒井店付近）の河川跡堆積土層断面である（仙台市教委 2002）。この旧河川は中在家南遺跡の東側から流入し、当遺跡中央を東西に横切り西側から出て、北東方向へ流れ、高屋敷遺跡北部をかすめて東方向へ流れている。その後、押口遺跡へ南から侵入し、そのまま北上している（図7）。この河川跡は、今日では宅地化しているが、以前は水田で、自然堤防上には集落が形成されその周辺は畑地となっていた。図6で注目したい土層は13層と14層である。

13層は粘土層で層厚は80cm～10cmと場所による違いはあるが、全体に厚い。遺物は弥生土器と土師器が出土しているだけで非常に少ない出土状況である。時期は特定できないが古墳時代である。

14層は、同遺跡中央部付近で「15層の上に3cm前後の厚さで薄く堆積」しており、黒色砂質粘土層、また別の場所では黒色泥炭質粘土層と黒色粘土層で、大量の樹枝片等を含んでいる。また14層の最下層には砂の薄層が堆積している。弥生土器が出土しているが、それらは弥生時代中期中葉に相当するものであった（仙台市教委 1996,2002）。薄い砂層の存在や黒色の粘土層が数cm～10cmと層が薄いことなど、津波堆積の土層に相当するものと推測した。

### ② 中在家南遺跡

中在家南遺跡東端の北側自然堤防上から弥生時代中期の土壇墓と土器棺墓が7基発見されている。この付近は同時期の墓域であったと思われる。その墓域から約150m西側には、古墳時代前期の方形周溝墓が検出されている。また、押口遺跡と同じように当遺跡は木製品の出土が際立っている遺跡である（仙台市教委 1996）。

1) 図7は2000年実施の第4次発掘調



図8 中在家南遺跡・押口遺跡と河川跡の流路



図9 小溝状遺構群（畠跡の耕作痕跡）と1号周溝墓、遺物包含層の検出図（仙台市教委 1996）

査において発見された河川跡土層断面である。14層は、遺物出土は少なく、弥生時代中期の弥生土器と農具や杭等の木製品が出土している。押口遺跡と同じような「植物遺体を多く含む黒色粘土層」で、「最下層部と15層の境には、砂を多く含んでいる」（仙台市教委 2002）ことから、津波の痕跡と推測した。

2) 図7において、南小泉遺跡方面より南下してきた旧河川は、中在家南遺跡の西側地域で方向を北東に変え下っているが、この方向を変えた付近の土層は、非常に特異な様相を示していると思われる。この付近では、14層と15層との区別はつかず、15層は4層に分かれていて、上から2層目の15b層は粘土層であり、砂の簿層を縞状に含んで

いる。また、15a・c・d層からの遺物出土は、土器木製品等多量にあるが、15b層からの遺物出土はほとんどない。以上より15b層の成因について「急激な土砂の運搬・堆積作用によって形成された土層」であると考えられている（仙台市教育委員会 1996）。また15層の堆積期間は、遺物の出土状況から「土器の1型式程度の期間内に埋没した可能性が高い」と考えられている。土器の1型式程度の期間とは、一般的には10～30年程度の期間をさすようだ。「急激な土砂の運搬・堆積作用」や15層が非常に短期間に形成されたことを考えると、津波が関係していることが予想される。しかし、15b層を形成した「急激な土砂の運搬・堆積作用」が、杓形遺跡で発見された津波堆積層と同じく巨大津波の痕跡と考えられるかは推測外の問題である。

### (3) 再び鍬が入る

遺跡廃絶中、津波襲来地に人間が立ち入らなかったということはなかった。弥生時代後期の遺物が押口遺跡や中在家南遺跡で発見されているが、継続して何かをしていた気配はない。ということは、狩猟や採集で一時的に立ち寄ったものと解釈される。一時的な活動ではなく農耕等継続した活動の遺構は検出されているのだろうか。

図9は、中在家南遺跡で弥生時代中期の遺物を大量に含んだ土層を取り除いている最中に発見された、畠跡の耕作痕跡（以下、「畠の耕作跡」）である（仙台市教委 1996）。畠の耕作跡は、図9でわかるように、一号方形周溝墓の中にあつた。この一号方形周溝墓は、造営される際に弥生時代遺物包含層を削り取っていた。この付近からは弥生時代後期の土器が出土している。一号方形周溝墓と畠の耕作跡とは直接の重なり具合はないので、時期的な前後は、古い順に、1) 弥生土器の遺物包含層、2) 弥生時代後期の土器を使用した人々の時期、3) 畠の耕作跡、4) 一号方形

周溝墓となる。この時の畑の耕作は、弥生時代後期の終わり頃から古墳時代の直前の時期だと考えた。

おそらく、この時の畑の耕作面積は、方形周溝墓の範囲に収まるものではなかったと推測した。他にも同様の農地はあったと思う。上記の畑の耕作は、古墳時代に盛んに津波襲来地という「恐れる」場所にまで農地を広げようとした衝動の、初期の具体的な動きととらえることができる。

中在家南遺跡では、以上のような動きが見られたが、1Gや中在家南遺跡と立地条件や環境が同じ2Gでは、古墳時代前期になるまで人々の活動は、全く見られなかった。

### 3 まとめと今後の課題

(1) 津波の痕跡調査を行い、次のことがわかった。

1) 沓形遺跡で弥生時代中期中葉の水田跡上面で、津波堆積物が発見された。津波の浸入域は当時の海岸線から4.2km陸側である。津波被害にあった仙台平野の当時の遺跡は、以降400年間も打ち捨てられた。

2) 藤田新田遺跡では、遺構等は津波によってことごとく破壊されたと思われる。水田畦畔等も破壊されてしまい、後の人の耕作による攪乱も加わり、遺構のほとんどは破壊消失し、わずかに溝跡だけが残ったものと推測した。

3) 今泉遺跡や高田B遺跡では、弥生時代中期中葉に流れていた旧河川跡から、土器や木製品が大量出土している。筆者はその出土状況と南三陸町での津波体験とを照らし合わせ、木製品等の大量出土状況を3.11震災時の大量の廃材の残され方に似ていることや、「水漬け」とは考えられないことから、津波の痕跡と考えた。

4) 押口遺跡や中在家南遺跡では、土層14層が砂層を含む粘土層に津波の痕跡があると考えた。中在家南遺跡西側にある旧河川

跡の15b層は「堆積状況や遺物出土状況から、急激な土砂の運搬・堆積作用によって形成された土層」であり15層の堆積期間も、「土器の1型式程度の期間内に埋没した可能性が高い」とされている。このことは、15b層を、沓形遺跡で発見された津波堆積物と同様の巨大津波が関係していると考えたい。しかし、筆者には「急激な土砂の運搬・堆積作用」を津波痕跡と推測することは不可能である。

(2) 中在家南遺跡で、弥生時代の終わり頃から古墳時代直前の頃の畑の耕作跡が発見された。古墳時代になると盛んに津波襲来地にまで農地を広げたが、この畑の耕作跡は、農地を広げようという衝動の、初期の具体的な動きととらえることができる。

中在家南遺跡では、以上のような動きが見られたが、他の1Gや2Gでは古墳時代前期になるまで、人々の活動は全く見られなかった。

(3) 今後の課題として、第1に弥生時代中期の遺跡の廃絶状況と、その後の津波襲来地への農地の拡大状況について、仙台平野全域に範囲を広げて調査すること、第2に、仙台平野には巨大な古墳が出現したが、古墳の建設に至るまでを検討調査すること、以上を今後の課題とする。

### 4 終わりにあたって

本稿で行った津波痕跡探しは、状況で判断する手段しかなく、したがって、科学的に裏付けられたものではない。

旧河川跡に残された弥生時代中期の土層から、大量の自然木や木製品等の遺物が出土した。その出土状況が、3.11津波直後の河川に大量に残された木材などの状況と酷似していた。それを津波痕跡だと直感的に断定した。本来なら直感的な判断は排除されなければいけない。

弥生時代中期中葉に、仙台平野北部の多く

の遺跡が忽然と姿を消した。私は、その原因が巨大津波ということを知ったが、それは、杓形遺跡で発見された砂層が津波堆積物と認定されたからだ。しかし、杓形遺跡以外では津波の証拠と認定されたものはない。津波以外が原因で廃絶に至った遺跡があるかもしれない。杓形遺跡以外でも、廃絶の原因を探る必要があると考えた。

斎野氏の論文を読んで、対象を仙台市荒井地区と今泉や高田 B 遺跡、藤田新田・下飯田遺跡遺跡にまで広げたのである。3者を、それぞれ同じ血縁集団か何らかの繋がりを持った同族集団と考え、それぞれを同じグルー

プに一括りにした。研究を進めていくうちに、古墳時代に終着点を求めるようになった。なぜ400年後に津波被災地に進出して来たのかということと、なぜ古墳をつくるまでになったのかという関心がわいたからだ。これは、私自身の今後の課題である。

今回の研究活動の最大の成果は、考古学に関する知識量を大幅に増やせたことである。

富沢遺跡保存館佐藤祐輔氏の指導助言に感謝します。また、同館の各先生方の懇切丁寧な助言に感謝します。

#### 参考文献

- 相原淳一 2013「縄文・弥生時代における超巨大地震津波と社会・文化変動に関する予察」『東北歴史博物館研究紀要』13
- 飯沼勇義 2011『3.11その日を忘れない』鳥影社
- 石川日出志『農耕社会の成立 シリーズ日本古代史①』岩波新書 1271
- 岩本由輝他 2013『歴史としての東日本大震災』刀水書房
- 金関 恕『弥生時代の集落』学生社
- 斎野裕彦 2012 仙台平野中北部における弥生時代・平安時代の津波痕跡と集落動態 平成19年度～平成23年度 文部科学省私立大学学術高度化推進事業オープン・リサーチ・センター整備事業 東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態的総合研究 研究成果報告書Ⅰ(抜) 東北芸術工科大学東北文化研究センター編
- 佐原真・都出比呂志『古代史の論点① 環境と食料生産』小学館
- 澤井祐紀他 2007「ハンディジオスライサーを用いた宮城県仙台平野(仙台市・名取市・岩沼市・亘理町・山元町)における古津波痕跡調査」『活断層・小地震研究報告』7
- 澤井祐紀他 2008「ハンドコアラを用いた宮城県仙台平野(仙台市・名取市・岩沼市・亘理町・山元町)における古津波痕跡調査」『活断層・小地震研究報告』8
- 仙台市教育委員会 1994『今泉遺跡第3次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書 185 集
- 仙台市教育委員会 1995『下飯田遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書 191 集
- 仙台市教育委員会 1996『中在家南遺跡他 仙台市荒井と地区画整理事業 関係遺跡発掘調査報告書 第1分冊 本文編』仙台市文化財調査報告書第 213 集
- 仙台市教育委員会 2000『高田 B 遺跡 第1分冊 本文編』仙台市文化財調査報告集第 212 集
- 仙台市教育委員会 2002『中在家南遺跡(第3・4次) 押口遺跡(第3次) 発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書 第 255 集 押口遺跡は、1次2次調査ではⅠ区とⅡ区、3次調査では南区と北区がある。
- 仙台市教育委員会 2010『杓形遺跡 仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書Ⅲ』仙台市文化財調査報告書第 363 集
- 仙台市教育委員会・東北電力グリーンプラザ 2014『発掘された仙台』第60回文化財展
- 松本秀明・熊谷真樹・吉田真樹 2013「仙台平野中部にみられる弥生時代の津波堆積物」『人間情報学研究』18

宮城県 2011 『宮城県第 4 次地震被害想定調査報告（津波）』

宮城県教育委員会 1994 『藤田新田遺跡』 宮城県文化財調査報告書第 163 集

文部科学省研究開発局・国立大学法人東北大学大学院理学研究科・国立大学法人東京大学地震研究所・独立行政法人産業技術総合研究所 平成 18・19・20 年 『宮城県沖地震における重点的調査観測（平成 17・18・19 年度）成果報告』

## 縄文時代の音楽

—縄文の森広場「縄文のまつり復元と創造プロジェクト」に参加して—

熊谷美恵子

### I. はじめに

私は平成26年度から仙台市縄文の森広場のボランティアとして活動している。

縄文の森広場では、平成20年度より「縄文人のまつり」を復元する事業を開始した。アイヌの音や歌、縄文時代の楽器に類するモノ、南方諸島の音やくらしなど、さまざまなことから考察し、現在までに、楽器として有孔罎付土器15点、篋形木製品7点を製作している。

私も、ボランティアになってすぐ、何もわからず篋形木製品を製作し、それが現在の琴かも知れない、と聞かされ驚き、縄文人の音楽に興味を持った。そこで、プロジェクトの経過報告を兼ねながら、縄文時代の音楽について考えてみたいと思う。

### II. 調査の方法

縄文の森広場での「縄文人のまつり」の復元事業としての調査は、

- ・ 縄文時代の楽器の可能性のある資料
- ・ 民俗事例（北海道や南方諸島を中心に）

を対象に行っている。

メンバーは、協力を申し出たボランティア有志と、縄文の森広場ボランティア有志、職員である。

私が参加したのは、平成26年度からで、

- ・ 5月 篋形木製品製作開始
- ・ 6月 土器太鼓の皮張り作業
- ・ 7月 篋形木製品に張るカラムシ糸製作
- ・ 7月26日（土）縄文サマーコンサートにてプロによる土器太鼓・篋形木製品・弓・黒曜石を叩く演奏

- ・ 11月 縄文ふゆのコンサート出演に向けて、土器太鼓の演奏練習開始

- ・ 平成27年2月7日（土）縄文ふゆのコンサート終了後、演奏発表。と活動している。

### III. 調査の成果

まず、縄文時代の楽器、という定義を、ここでは「人間が音を鳴らすために用いる道具」（山田1998）とし、縄文の森広場で実際に製作した有孔罎付土器と、篋形木製品を、楽器に類するモノとして扱う。

#### 1. 有孔罎付土器とは（写真1）

「直立した平縁の口縁の下に罎状の隆帯が一周する土器で、罎の真上もしくは罎自体に径3～5ミリ程度の小孔がやはり口縁部を一周するように多数穿たれている」（山田1998）

縄文時代前期から出土した、中部山岳地帯のものが最も古く、数も多い。関東・北陸・東北南部にもみられる（山田1998）。

特殊な形状や、胴の表面に人やカエル状、



写真1 復元した有孔罎付土器

眼鏡状などの表現があることから、用途には諸説ある。

1. 澱粉質の保存容器説—江坂輝弥
2. 種子壺説—藤森栄一
3. 醸造具説—武藤雄六
4. 太鼓説—山内清男・中村五郎（田中・佐原 2011）

江坂氏は、全面を研磨し、表面は緻密で、湿気を防げそうだということから、「澱粉がいつも乾燥した状態で保存できるような苦心がはらわれたものと推察される」としている。

藤森氏は、小孔を緊縛孔と考えている。

武藤氏は、小孔をガス抜き孔と考え、土器内面にしばしば塗られた顔料について、水気の亡失を防ぐためのものとしている。

山内氏は、アフリカ・アメリカ・近東の諸民族の土器太鼓などからの推察で、「皮膜は小孔に栓をして止められたものであろう」としている。

中村氏は、山内氏の説に加えて、マヤ古典期の土器太鼓を紹介している（長沢 1980）。

太鼓として、他の時代で見られるものは、古墳時代の形象埴輪である。群馬県伊勢崎市上武士天神山古墳出土の埴輪は、樽形で、両側の口に二枚皮を張った太鼓を、人物が左の腰あたりで斜めに構えて奏でている姿をしている。埼玉県熊谷市中条古墳群女塚1号墳出土の埴輪は、太鼓状のものを腕全体で抱え込む姿である。

どちらの埴輪も、太鼓が二枚皮で、日本の伝統音楽で用いられる太鼓も、二枚皮のものが圧倒的に多いことから、日本の太鼓の歴史の源流が、古墳時代までさかのぼれる可能性がある（山田 1998）。

## 2. 篋形木製品とは（写真2）

「細長い一枚板から削り出されて作られた」もので、「器体の形が先へ行くほど窄まっていく篋状を呈」し、「幅が広いほうの端に二つの突起を持つのが特徴」（山田 1998）である。

大正・昭和初年に、青森県八戸市是川遺跡から19点出土し、その後北海道小樽市忍路土場遺跡、滋賀県彦根市松原内湖遺跡などからも発見された。

篋形木製品の用途についても、諸説ある。代表的なものとして、

1. 縄文琴説—江坂輝弥・鈴木克彦・岡崎晋明・小島美子
  2. 縄文琴反対説—松澤修・細川修平
- がある。

江坂氏が「上部に数本の弦を張った楽器ではないかとおもうのであるがいかかなものであろう」としたのが最初の楽器説で、それを「縄文琴」と命名したのが鈴木克彦氏である。

小島氏は、琴を「板の上に弦を張って鳴らす形態」と定義している。

岡崎氏は、「弥生時代の琴の形態に1～3種類あり、縄文琴の系譜を引く一類が弥生前期まで作られた」と考えている（鈴木 2012）。

篋形木製品は、機織の緯打具である、としたのは、松澤氏である。

弦の張られた痕跡がなく、琴柱による摩滅も見られないことから、「弦楽器として使用されたとする意見を十分に否定させるものである」（山田 1998）としたのは細川氏

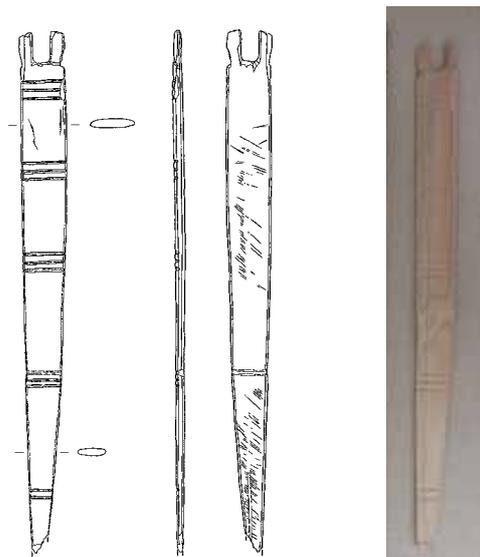


写真2 篋形木製品と復元品

である。

縄文時代以外で見られるのは、弥生時代前期三重県津市納所遺跡、大阪府東大阪市瓜生堂鬼虎川遺跡があり、弥生時代中期にも数点の出土がある。それ以降、中期後半になると、鳥取県鳥取市青谷上寺地遺跡の箱作り、共鳴槽付きになり、後期は形態も多様である。

古墳時代に入ると、さまざまな形象埴輪に琴を弾いている姿がある。

### 3. 実験の成果

このような遺物の使用方法を解明するために、縄文の森広場において、さまざまな実験を行った。以下がその成果である。

・5月：青森県是川遺跡から出土した、篋形木製品数点を参考に、板材を削り、製作開始。道具は特にこだわらず、ナタやカンナ、石器など、それぞれが作りやすい方法で製作した。

・6月：平成22年度から平成25年度にかけて製作した各地で出土した土器のレプリカ8点と、オリジナル7点の土器太鼓にブタの生皮を張る作業をした。口径より大きめにハサミで切り、孔に木片を刺して留めた。乾燥まで約1週間かかった。生皮の時に叩いた音は、「ボヨン、ボヨン」と低音で小さく、乾燥後は「トン、トン」と高音で大きくなった。土器の大きさと、音の高低はまちまちで、大きい土器だから低音、小さな土器だから高音、という予想は外れた。何故そのような結果になったのか、理由は分からない。

・7月：縄文の森広場で栽培しているカラムシを使い、篋形木製品の弦として糸を製作した。できるだけ長い茎を選び、水につけて湿らせ、石器で茎の表面を削り取り、材料を作った。それを撚って、糸にした。乾燥後、琴に張った。弦の素材は、カラムシのほかに、針金、馬の毛、ヴァイオリンの弦などを集めたが、結局、縄文時代にあった素材のカラムシを使用した。

弦は、角状突起に引っかけて結び、先端部で再び結んだ。ただ、この状態では糸がピン

と張らず、音も出ない状態だったため、木片で琴柱を作り、強く張った状態にした。すると、指で弦を弾くと、「ビン、ビン」と低い音が琵琶の音色に似た良い音が出た。

・7月26日：縄文サマーコンサート

「高橋泉と縄文ジャズオーケストラ」の方々に、土器太鼓によるセッションをして頂いた。

叩く方法は、手と鹿角、木の枝を使う3種類。手で叩くと音色が丸く優しくなり、鹿角で叩くと低く大きな音に、木の枝で叩くと軽快でよく通る音色になるように感じた。

篋形木製品（琴）は、ヴァイオリン奏者の方が、当日初めてだったのにもかかわらず、「ドレミファソラシド」と音階を奏で、『さくらさくら』を即興で演奏して下さった。さらにもう少し、というリクエストに『川の流れるように』も奏でてくれた。

その他に、楽器に類するモノとして、弓を木で叩いたり、黒曜石を紐で結んで棒に吊るし、木で叩くパフォーマンスもあった。弓は「ボン、ボン」と低いベースのような音（マイク使用）、黒曜石はガラスを叩いたような「キン、キン」という高く涼やかな音がした。ただ、黒曜石はすぐ割れてしまい、リズムや音程まで取ることはできなかった。

・11月

「太鼓を叩く位なら、素人の私達にも出来るのでは？」ということになり、翌年2月の縄文ふゆのコンサート終了後に、演奏発表することになった。譜面を書ける人が、サマーコンサートでの演奏を参考に楽譜を作成し、練習を開始した。

・平成27年2月7日縄文ふゆのコンサート

コンサート終了後、職員からプロジェクト事業の概要と使用する楽器の説明があり、有志による演奏を行った。その後、「Sonid del Viento」の皆さんと一緒に演奏、アンコールを2回行った。

使用した太鼓は10個。私が使用したものは新潟県和泉A遺跡出土の複製で、木の枝



写真3 縄文ふゆのコンサートの様子

を用いて叩いた（写真3）。

#### IV. まとめ

音楽は、人類の誕生とともに何らかの形で存在していたと思われるが、音は記録として残らない。手がかりとなるのは、現存する楽器と、それに類似する遺物からの推察である。

縄文時代の楽器については、さまざまな説があり、有孔罌付土器を太鼓、箆形木製品を琴という扱いにも確たる証拠はないのだが、実際に製作に参加して感じたことは、それらが楽器である、という可能性が、全くゼロではないのではないか、ということであった。

有孔罌付土器が、仮に貯蔵容器とするならば、中に食料、又は酒が蓄えられていることは、生活の安定、安心となり、縄文時代の人々

にとって喜ばしいことであり、その容器は特別なモノとして扱われたのではないだろうか。そして、その思いが「まつり」へとつながったとしたら、そこに音楽は存在しないだろうか。喜ばしいもの（有孔罌付土器）を、叩いているうちにリズムとなり、音楽となっていったと考えるのは、無理があるだろうか。

箆形木製品も、琴とはいっても、弦は出土していない。後世の琴にみられる、弦を立てる琴柱の存在も確認できていない。さらに、遺物によっては、弦をまとめる「集結穴」がないものもあり、どのように弦を張ったのかも不明である。

しかし、縄文サマーコンサートでは、カラムシ糸を張っただけのシンプルな形で、音階を奏でることができ、その音色は、小さいながらも優しいものであった。琴ではなく、別の道具であったとしても、竪穴住居の中で、一日を無事に終え、火を囲んで家族が眠りにつく束の間に、子守歌のように誰かが手元にあったそれを楽器に見立て、つまびいたとしたら、幸せな気持ちにならないだろうか。

縄文時代の音楽は、分からないがゆえに、空想の世界で楽しむことができた。考古学を学ぶことは、ロマンである、ということを実感した。これをきっかけに、ますますさまざまな遺物に興味が増したことは、うれしいお

#### 参考文献

- 茨城県立歴史館 1995 『特別展 音の考古学－音具と鳴器の世界－』 茨城県立歴史館  
大津市歴史博物館 1995 『開館5周年記念企画展 近江の古代を掘る－土に刻まれた歴史－』 大津市歴史博物館  
岡田敬司・笹森建英 1994 「縄文時代の土笛－形状・音・用途－」 『弘前大学教育学部紀要』 72  
鈴木克彦 2012 『縄文琴の研究－是川中居遺跡出土箆形木製品に関する研究報告書－』 弘前学院大学地域総合文化研究所  
田中琢・佐原真 『日本考古学事典』 三省堂  
皇室博物館 1921 『皇室博物館学報第2冊 正倉院楽器の調査報告』 皇室博物館  
長沢宏昌 1980 「有孔罌付土器の研究」 『長野県考古学会誌』 35 長野県考古学会  
長沢宏昌 1984 「有孔罌付土器とその用途実験」 『甲斐路』 52 山梨郷土研究会  
蓑輪温子 2005 「シカ皮の太鼓膜利用に関する実験考古学的研究－有孔罌付土器太鼓説に基づいて－」 『動物考古学』 22 動物考古学研究会  
山田光洋 1998 『楽器の考古学』 同成社

# 東日本大震災復興事業と発掘調査の連携について

小林 信行

## I. はじめに

東日本大震災が発生して4年が過ぎた。尊い命と財産が失われ、現在も多くの人々が仮設住宅での生活を余儀なくされている。以前の生活を一日も早く取り戻すために様々な震災復興事業が行われているが、同時にこの復興事業に伴って多くの遺跡発掘調査が進められている。円滑に復興事業を進めるために埋蔵文化財行政はどのように対応したのか、阪神・淡路大震災と今回の大震災をケースと考えてみたい。

## II. 復興事業と発掘調査

### 1. 東日本大震災の被害状況等(宮城県調べ)

平成23年3月11日午後2時14分三陸沖でマグニチュード9.0の大震災が発生し、最大震度7(栗原市)を記録した。平成27年1月31日現在、宮城県における被害状況は表1のとおり。

宮城県では平成32年度を復興の目標年次とする「宮城県震災復興計画」を策定し、国や市町村と連携し様々な復興事業に取り組んでいる。ようやく、住宅再建やインフラ整備が本格化しつつあるが、被災に合わせた方々に一日も早く安心して暮らせる日が来るのを祈るものである。

さて、復興道路事業、集団移転事業及び土地区画整理事業等の復興事業に伴って、同時に多くの遺跡発掘調査が進められている。

### 2. 震災復興事業に伴う発掘調査の実施

#### (1) 県内の主な遺跡

震災復興事業に伴って発掘調査が実施された、県内の主な遺跡は以下のとおり。

①杓形(くつかた)遺跡(仙台市若林区)－弥生時代の大津波痕跡が判明

この遺跡は、標高約2mの後背湿地にあり、平成19年度から平成23年度に発掘調査が行われた。調査の結果、弥生時代中期以前から中世にかけての水田跡が見つかり、中でも弥生時代中期の水田跡は津波堆積物で覆われ、津波被害を受けて、そのまま廃絶したと考えられている。当遺跡は、当時の海岸線から約4.2kmに位置し、今回の東日本大震災(津波遡上距離約4km)と同規模の大津波が弥生時代に発生したことが、発掘調査で判明した。

②荒井広瀬遺跡(仙台市若林区)－弥生時代の地震痕跡と津波痕跡が同時に発見

杓形遺跡の西隣に位置する当遺跡は、集団移転先である土地区画整理事業内の道路建設に伴い平成25年度に発掘調査が行われた。

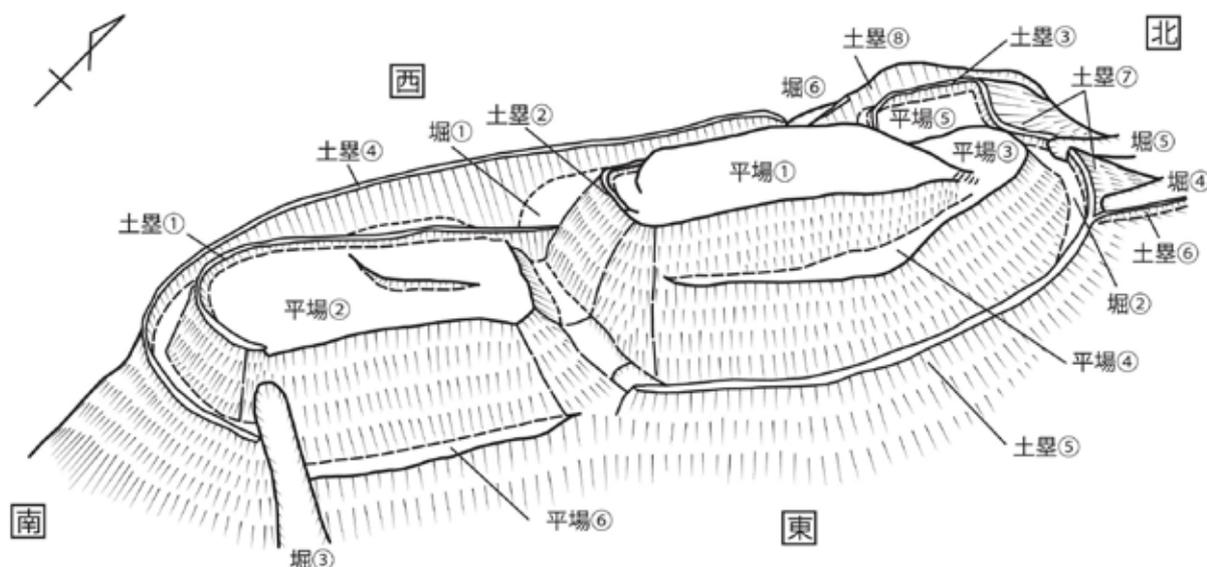
表1 宮城県の被害状況

人的被害(継続調査中)			
死者(関連死を含む)	10,511名	行方不明者	1,258名
重傷	502名	軽傷	3,615名
住家・非住家被害(継続調査中)			
全壊	82,993棟	半壊	155,126棟
被害額(継続調査中)			
9兆2,207億円		(平成26年9月10日現在)	

調査の結果、幅 1m、深さ 20cm 程度の弥生時代の溝跡が発見され、溝底からは深さ 50cm 以上に及ぶ地割れの跡と杓形遺跡と同じ津波堆積物の砂層が検出された。約 2000 年前にも、東日本大震災と同じ日本海溝周辺で地震が発生し、津波が仙台平野を襲ったことが判明した。

③波怒棄館(はぬきだて)遺跡(気仙沼市)  
 -マグロ漁で栄えた縄文時代前期のムラ  
 この遺跡は、旧唐桑町にある縄文時代前期の

集落遺跡である。平成 24 年度から平成 25 年度に防災集団移転促進事業予定地として発掘調査が行われた。調査の結果、調査区内丘陵斜面で貝塚が発見され、土器、石器等の他、140kg を超える大量のマグロの骨が出土した。マグロの骨の状況から、この地で大きなマグロを解体していたものと考えられ、縄文時代前期のムラの様子が明らかとなった。  
 ④新井田館(にいだたて)遺跡(南三陸町)  
 -中世の山城跡



第 1 図 新井田館跡の鳥瞰図 (南三陸町教育委員会 2013)



写真 1 南三陸湾を望む



写真 2 平場①を望む

南三陸町にある新井田館遺跡について、現地見学したので次に述べる。

## (2) 新井田館遺跡の概要

この遺跡は、志津川湾を見下ろす標高 67m の丘陵上に築かれた山城跡であるが、文献には見えず、城主は不明である。津波復興拠点整備事業を進めるに当たって、平成 25 年 3 月から発掘調査（調査面積：約 20,000㎡）が行われた。調査の結果、平場 6 カ所、堀 6 条、土塁 8 条が見つかったが、平場 6 カ所のうち、一番高いところにある長さ 47m、幅 14 m の平場（平場①）が最も重要な平場と考えられている。この平場から、掘立柱建物 14 棟、柱列 14 条、土坑 1 基が見つかった。

主な出土品として、陶器と古銭等がある。陶器は 14 世紀後半から 15 世紀前半にかけての天目茶碗と愛知県瀬戸産の碗であり、古銭は中国明時代の洪武通宝（1368 年初鑄）や永楽通宝（1408 年初鑄）が含まれている。このことから、この山城が築城されたのは 15 世紀前半頃（室町時代）と考えられ、17 世紀（江戸時代）には使われなくなったと考えられている。山城全体を調査する例は全国でも珍しく、今後、山城を研究する上で重要な成果と考えられている。

私が、現地に足を運んだのは平成 26 年 9 月であったが、現地に立つと遠くに志津川湾が望め周囲を見下ろす位置に存し、防御施設として堅牢な施設であったと思われた。

## 3. 震災復興事業と発掘調査の連携

円滑に復興事業を進めるために埋蔵文化財行政はどのように対応したのか、二つの大震災を例に①法的な緩和措置、②財政的な措置、③人的な支援体制の面から述べてみたい。

なお、阪神・淡路大震災は平成 7 年 1 月 17 日の早朝に発生し、関連死を含めた死者が 6,434 名、負傷者が 43,792 名、住家被害が約 64 万棟という大惨事をもたらした。埋蔵文化財にも甚大な被害が生じ、当時、被災地

における遺跡数は 280 遺跡、面積 253.6ha という膨大なものと推定された。

## (1) 法的な緩和措置

### 阪神・淡路大震災のケース

①ライフラインの復旧、仮設住宅の建設、被災建物の撤去・整地等緊急を要する工事については、平成 7 年 5 月末日の着工までは文化財保護法に基づく届出・通知は要しないこととした（平成 7 年 2 月 23 日付け文化庁次長通知）。

②平成 7 年 6 月 1 日以降における事前の確認調査は、周辺地域の従前の発掘調査等に基づく既存の知見によることとすることと、記録保存のための発掘調査は、工事による掘削が遺構を損壊する場合に限って行うこととした（平成 7 年 3 月 29 日付け文化庁次長通知）。

③文化庁次長通知を受けて兵庫県教育委員会は具体的な取扱いを定めるとともに、協議の場として各自治体と連絡会を設置して、調査方法等における各自治体間での不統一、不均衡が生じないようにした。

### 東日本大震災のケース

①文化庁は、ライフラインの復旧及び仮設住宅の建設等緊急を要する工事については、文化財保護法に基づく届出・通知は要しないと考えられることを宮城県教育委員会に通知した（平成 23 年 3 月 25 日付け文化庁次長通知）。

②宮城県教育委員会では、この文化庁次長通知を受けて、緊急を要する復旧工事については、当分の間、文化財保護法に基づく届出又は通知は要しないこととした（平成 23 年 3 月 30 日付け宮城県教育委員会教育長通知）。また、発掘調査基準の弾力的な運用を図ることとし、復興事業に限り、原則として遺跡が壊される範囲（平面、深さ）のみを調査対象とした。これによって、盛土施工部分や湿地部の下層の調査等を省略することが可能となった。

## (2) 財政的な措置

### 阪神・淡路大震災のケース

復旧・復興事業に伴う発掘調査に対する国庫補助事業対象は、公共事業を含めたすべての試掘・確認調査と、個人専用住宅だけでなく個人企業から中小企業までの本発掘調査へ対象枠が拡大された（表2）。

### 東日本大震災のケース

発掘調査は、復興交付金で実施できることとなった。その結果、阪神・淡路大震災と異なり、各市町村が行う集団移転等の復興事業に伴う調査費は、実質全額国庫で賄われた。

### (3) 人的な支援体制

#### 阪神・淡路大震災のケース

他都道府県から兵庫県教育委員会に派遣された専門職員は表3のとおり。

なお、平成7年度には、宮城県から1名、

平成8年度には、宮城県から2名と仙台市から2名が派遣された。

#### 東日本大震災のケース

他 都道府県から宮城県教育委員会に派遣された専門職員は表4のとおり。

今回の大震災に際して、平成24年度から平成26年度にかけて、兵庫県教育委員会から延6名、神戸市教育委員会から延3名の職員派遣を受けた。また、発災直後に兵庫県教育委員会から阪神・淡路大震災時の情報提供をいただくとともに、文化庁と被災3県(宮城県、岩手県、福島県)間で開催された調整会議の場に兵庫県教育委員会の職員にオブザーバーとして参加していただき、経験を踏まえた様々な助言をいただいたことを付け加えておきたい。

表2 復旧・復興事業と国庫補助事業との関係

調査種別	復興等事業者・事業別		補助対象		補助主体 (補助事業者)	負担割合		
			従前	今回		国	県	町
事前の 確認調査	個人	住宅	○	○	市 町	1/2	1/4	1/4
		その他		○				
	中小企業者			○				
	大企業者			○				
国の機関等	国・県等			○	県	1/2	1/2	—
	市・町等			○	市 町	1/2	1/4	1/4
記録保存 のための 発掘調査	個人	住宅	○	○	市 町	1/2	1/4	1/4
		その他		○				
	中小企業者			○				

表3 兵庫県教育委員会に派遣された専門職員(名)

区分	兵庫県職員	派遣職員	合計
平成7年6月	12	25	37
平成8年4月	10	49	59
平成9年4月	10	25	35

表4 宮城県教育委員会に派遣された専門職員(名)

区分	宮城県職員	派遣職員	合計
平成24年度 (上半期)	20	9	29
平成24年度 (下半期)	20	17	37
平成25年度	20	24	44
平成26年 (4月～9月)	20	17	37
平成26年 (10月～12月)	20	16	36
平成27年 (1月～3月)	20	18	38

以上、震災復興事業と発掘調査の連携について、二つの大震災の時はどうだったのか述べてきた。これらから言えることは、一日も早い復旧・復興を図るためには、発掘調査の効率化と迅速化が求められるが、そのためには、文化財保護法の弾力的な運用と発掘調査費の全額国庫対応、そして、何よりも、マンパワーの投入が必須の条件であるということである。南三陸町にも、平成25年度に8名（宮城県教委への派遣職員5名、宮城県教委職員1名、南三陸町への派遣職員2名）の専門職員が派遣されたが、町職員によれば、応援職員に大いに助けて頂いたという。

#### 4. 発掘調査に対するマスコミの反応

阪神・淡路大震災が未曾有の大災害にもかかわらず、復興事業と並行して発掘調査を行うことができたのは、既述の特例措置に加えて、①各学会、マスコミ、国と県などの多くの関係者の思いが一つになったこと、②地域住民の文化財に対する意識が高かったことが背景にあったといわれている。それでも、震災発災から1か月が過ぎた平成7年2月の時点では、埋蔵文化財の存在が復興の妨げになる可能性があるとの報道がなされた。このような中、地元の神戸新聞社は「地下の遺物を邪魔者にするな」というタイトルで「埋蔵文化財が復旧・復興の阻害要因として白眼視されることなく、自分たちの財産、祖先の遺産として大事に、愛情を持ってきちんと扱われることを望んでおきたい」と平成7年4月21日の社説で取り上げた。この社説は埋蔵文化財担当者にとって大いに励みになったということである。

東日本大震災においては、平成24年3月21日付けの河北新報は「埋文調査 移転の足かせ」というタイトルの記事を載せ、南三陸町の高台移転に伴う遺跡調査が復興の妨げになる可能性についてふれている。これに対

して、文化庁は派遣職員の増員により「調査を迅速に済ませ、復興につなげたい」とコメントしている。

また、朝日新聞は、平成27年1月3日から1月30日にかけて「プロメテウスの罫 広野を掘れば」という連載を組んだ。埋蔵文化財調査の応援に来ていた兵庫県教育委員会の専門職員と福島県広野町の人々とのやりとりを記事にしたものである。一日も早い復興を願う地元の人々は、当初、発掘調査は復興の妨げになると考えていたものの、この兵庫県の職員と話し合いを続けていくうちに、次第に、復興事業も発掘調査も、復興に当たっての両輪であると意識するようになってきたという。そして、災害公営住宅建設予定地から、奈良時代の公的機関である「駅家」関連施設の可能性がある遺構が見つかり、町は、遺構が集中する主要部分を保存することとした。「遺跡のある町を誇りに思う」という子どもの発言が印象に残っている。

### III. まとめ

東日本大震災の復興に当たって埋蔵文化財行政サイドがどのように対応したのか、先例とも言える阪神・淡路大震災の例も取り上げながら考えてきた。一旦途切れた地域コミュニティを再生するためには、まずは、自分たちが暮らす土地が、これまでどのような歴史をたどってきたのかという情報を地域住民が共有することが大事だと考える。そして一日も早い復旧・復興事業が推進され、同時に適切に埋蔵文化財の保護がなされることを切に願ってやまない。

最後に、このレポートをまとめるにあたって、宮城県教育委員会および南三陸町の職員の方、そして地底の森ミュージアムの佐藤祐輔先生に、ご指導・ご助言をいただいた。改めて、御礼を申し上げます。

#### 参考文献

- 日本考古学協会・阪神・淡路大震災埋蔵文化財対策特別委員会 2000『地震災害と考古学 I ー阪神・淡路大震災の被災状況と復興への取り組みー』 真陽社
- 文化庁 2012『発掘された日本列島 2012』 朝日新聞出版
- 文化庁 2013『発掘された日本列島 2013』 朝日新聞出版
- 文化庁 2014『発掘された日本列島 2014』 朝日新聞出版
- 南三陸町教育委員会 2013『新井田館遺跡発掘調査現地説明会資料』 南三陸町教育委員会

## 秋保温泉郷の縄文遺跡を探る

佐藤 紳



写真1 皮袋形土器（秋保里センター展示）

### I. はじめに

日本人は無類の温泉好きと言われる。その類に漏れず、この私も温泉好きを称している。特に冬場、やっとの思いで辿り着いた秘湯ともいえる温泉にどっぷりと浸かる。冷え切った体を芯から温め癒される瞬間、「あーっ」と思わず声が出てしまうのは私だけではないだろう。まさに至福の瞬間である。小説家の田山花袋は、『温泉めぐり』の冒頭でこう述べている。「温泉というものはなつかしいものだ。長い旅に疲れて、何処かこの近所に静かに一夜二夜をゆっくり寝て行きたい……。そこに今夜は静かにゆっくり湯に浸かって寝ることができると思うほど、旅の興を惹くものはない」（田山 1926）。ただ頷くばかりである。

私は、湯に浸かりながらよく思うことがある。日本人は、いつの時代から温泉に入っていたのだろうか。この素朴な疑問が、今回の研究のきっかけであり土台ともなっている。

そこで、本報告書では対象地域を地元秋保温泉郷とし、前述のテーマと共に秋保地域の

縄文遺跡を紹介しながら、秋保地域の縄文文化への導入として考察を進めることにした。

次の章では、上記のテーマに迫りつつ、日本の温泉の歴史について述べてみたい。

### II. 文献にみる文献

#### 1. 日本の温泉の歴史

日本は火山列島とも称され、各地に温泉が湧出している。温泉が一般的になったのは、江戸時代に湯治が盛んになった頃と考えられる。ちなみに、「温泉」という言葉の起源は、中央温泉研究所の甘露寺泰雄氏によると、唐の詩人、八居易によって作られた漢詩「長恨歌」の中に見られるという（茂木・山崎 2014）。引用すると「春寒賜浴華清池、温泉水滑洗凝脂」とあり、意味は「春まだ寒い時期に、華清池の温泉を賜い、温泉の水は滑らかに白い肌を洗う」と、楊貴妃をイメージしたものといわれる。しかし、地球の歴史がおよそ47億年であることから、温泉は人類が出現するはるか以前から存在していたことは明白である。ここでは史実などに基づき、日本の温泉の歴史を概観することにした。

#### ①鳥獣による発見伝説

歴史が古い温泉には複数の温泉発見の伝説が存在する。一番多いのが鳥獣による発見伝説である。たとえば、鹿が発見したとされる酸ヶ湯温泉（青森県）・鹿教湯温泉（長野県）・蛾々温泉（宮城県）や、熊が発見したとされる野沢温泉（長野県）、猿が発見したとされる鉛温泉（岩手県）、白鷺が発見したとされる道後温泉、鶴が発見したとされる鶴の湯温泉（秋田県）・上山温泉（山形県）、鶯が発見したとされる鶯宿温泉（岩手県）など多数ある。

## ②歴史上の人物による発見伝説

次に多いのが行者や名僧・武将による発見開湯伝説である。たとえば、行基が発見したとされる東山温泉（福島県）や、弘法大師が発見したとされる恐山温泉（青森県）、修善寺温泉（静岡県）、武田信玄が開湯したとされる下部温泉（山梨県・信玄隠し湯の一つ）、上杉謙信が開湯したとされる燕温泉（新潟県）、小野小町が発見したとされる小野川温泉（山形県）など多数ある。このような伝説の多くはフィクションと考えられ、おそらくは温泉周辺に住む人びとにより発見されたのではないかと推測される。

## ③古代文献に見られる温泉

『古事記』や『日本書紀』、『風土記』、『万葉集』などの文献に記されている温泉もある。かつて、記紀の記事は信憑性に乏しく、史事実として取り上げられないという風潮もあったが、最近では、伝承の中にも真実が含まれているという立場もある。その上で、ここでは上述の文献などに記されている「日本三古湯」と称される温泉を取り上げてみたい。

「日本三古湯」とは、有馬温泉（兵庫県）、白浜温泉（和歌山県）、道後温泉（愛媛県）を指すのが一般的である。有馬温泉は、『風土記』、『日本書紀』、『万葉集』に登場し、『日本書紀』によれば、舒明天皇が631年と638年に、647年には孝徳天皇が幸行されたと記されている。また、有馬温泉は大国主命と少彦名命の二神に発見され、三羽のからすがその発見を導いたとされる伝説もある。

次に白浜温泉。白浜温泉は、『日本書紀』によれば658年に齊明天皇が、690年に持統天皇、701年に文武天皇が幸行されたと記されている。『万葉集』には「牟婁の温湯」の名で登場している。

最後に道後温泉である。道後温泉は、夏目漱石の『坊ちゃん』でも知られ、3,000年の歴史をもつ国内最古級の温泉といわれる。『

古事記』、『日本書紀』、『万葉集』にもその記述が見られる。596年の聖徳太子の来湯や舒明天皇、齊明天皇の幸行など古くから知られた温泉である。特筆すべきは、道後温泉本館の南隣にある冠山で、縄文中期の土器・石鏝が出土しているということである。おそらく縄文人も温泉を利用したものと考えられている。これが道後温泉が3,000年の歴史をもつという云われでもある。

## ④考古学の視点からみた温泉

上述の道後温泉の他、考古学的な観点からは、長野県考古学会長であった藤森栄一氏の上諏訪温泉の発掘調査がある（1964年）。その調査報告を引用すると、藤森氏はこのように述べている。「現上諏訪駅前のデパートの建築工事のとき、地下5.5メートルの真っ黒な有機土層で、大石がごろごろと、ほぼ環状にならんだところがあった。硫化物の臭いが鼻をうった。硫黄質の湯がわいていたことは確実である。そしてその大石の破れ目やその付近一带から、爪型文の土器片や、刃だけ鋭く砥いだ局部磨石斧などがたくさん出てきた。いずれも湯垢らしいものがこびりついている。これは、約6,000年前の子母口（神奈川県標式遺跡）式という文化の人々である。私はいまのところ、はっきりわかる日本最古の入浴資料だと信じている」（藤森1969）。最近の研究では、奈良県立橿原考古学研究所の橋本裕行氏が「温泉考古学」を提唱し、内陸部に集落遺跡ができた要因の一つとして、近くに温泉があったことが関係していると推論、調査している（橋本2014）。特に、温泉の中でも塩化ナトリウムを含む温泉に注目し、草食動物は塩分を摂取する必要があり、温泉に集まって来る可能性があり、狩猟の点で有利になるという。また、古くは日本考古学の祖である浜田耕作氏も『青陵随筆～温泉雑記』の中で、1918年と翌19年に鹿児島県の橋牟礼川遺跡（当時は指宿遺跡を発掘した際に、指宿温泉を前にして「此

の開門嶽麓の温泉は、定めし石器時代の人民も知って居ったことであろう・・・」と記し、原始からの温泉の存在を認めている。

### ⑤禊・沐浴から考える温泉の歴史

人が水を浴びるという行為からも、温泉の歴史を考えてみたい。

この世の最初の生命は、水の中に誕生したことは誰でも知っている。したがって、水と生命体は一体であるといえる。水は人間が生命を維持していくためにはなくてはならない存在であり、精神・信仰の面からも、水は神道の清めの水・仏教の禊の水・ヒンズー教の沐浴の水・キリスト教の聖水と、身を清めるためにはなくてはならないものである。

日本の禊に関しては『魏志倭人伝』の中に記載が見られる。以下引用すると「己葬、挙家詣水中、澡浴以如練沐」、「人々は喪の期間が明けると、一家を挙げて水辺に赴き、水に浸かって沐浴した」とある。仏教伝来以前から水に入り身を清めていたことがわかる。日本で温泉が盛んになった背景には、このような禊の文化を無視するわけにはいかないだろう。温泉の歴史の出発点にあるのは、神や自然を崇拝するという自然信仰の精神があったと思われる。このように考えると、自然を神と崇拝した縄文時代が温泉の始まりと考えてもよいのではなかろうか。但し、旧石器時代にも宗教観があったとされ、それに関係する遺構などが発見されれば、縄文時代を超えての温泉の歴史が解明されるであろう。

次章では、宮城の温泉の歴史を概観してみたい。

## 2. 宮城の温泉の歴史

わが宮城県も名だたる温泉を有しており、鳴子・作並・秋保・遠刈田などの温泉地は、全国から良質の湯を求めにやって来る観光客で賑わっている。江戸時代に記された『諸国温泉効能鑑』がある。これは、全国の温泉を相撲番付のようにランク付けしたもので、そ

の中に鳴子温泉、秋保温泉の名が登場している。ちなみに山村順次氏が平成12年に作成した平成温泉番付によると、秋保温泉が東の前頭3枚目、鳴子温泉が同東の12枚目として紹介されている。参考までに、東西の横綱は、それぞれ東が草津温泉、西が湯布院温泉となっている。

ここで、宮城県内の主な温泉の歴史をたどってみることにする。

### ①鳴子温泉郷

宮城県の北部、大崎市の鳴子温泉郷は、川渡・東鳴子・鳴子・中山平・鬼首の5つ温泉からなっている。9種類の泉質をもつ、全国有数の温泉地である。源泉数も368本と、県内総数742本に対して、実に50%近くを鳴子温泉郷が占めている（宮城県平成26年3月31日発表・市町村別温泉源泉数による）。

代表の鳴子温泉は、『続日本後紀』によれば、837年（承和4）に瀧山が大噴火して鳴動が続き、各所に温泉が湧出し「鳴郷の湯」と呼ばれるようになったという。1200年近くの歴史をもつ温泉である。

### ②作並温泉

仙台市青葉区の西部にある作並温泉は、古くは湯治場として栄え、秋保温泉とともに仙台的の奥座敷と称される温泉である。作並温泉旅館組合の公式ホームページによれば、作並温泉は、「奈良時代、行基が東北地方行脚の際に、溪流の響きとともに聞こえてきた仏法僧の鳴き声に誘われて森の斜面に降り立ち、湧き立つ白い湯気を発見。その効能と湯浴みの仕方を人々に伝えた。」また、「鎌倉時代、源頼朝が藤原氏討伐の際に、傷ついた鷹が温泉につかり元気に飛び立つ姿を見て温泉を確かめた。」と開湯紹介されている。

### ③遠刈田温泉

宮城県側の蔵王の温泉であるのが遠刈田温泉である。由緒ある温泉神社や公衆浴場などが立ち並び、県内一の温泉情緒漂う温泉地と

いえる。

蔵王町観光協会の公式ホームページによると、遠刈田温泉は、昔は「湯刈田」ともいわれ、信仰登山の基地や湯治場として知られていたという。その歴史は、平安時代末期の伝説の商人である金売橘次(吉次の表記もある)が、岩崎山の金を掘った際に霊泉を発見したのが始まりという。しかし、史料では当地での金の採掘は慶長年間(1600年代)と記載が見られ、温泉の発見もこの頃ではないかと推定されている。

以上、宮城県内の主な温泉の歴史を見てきたが、発見以前から温泉の湧出はあったはずである。温泉自噴数からみると(平成20年度環境省資料による)、大分県が1336本でトップ、以下北海道931本、鹿児島県796本、長野県430本、宮城県389本と、我が県が堂々の第5位となっている。この数字からも、縄文時代においても自然に湧出していた温泉が豊富に存在していたことは想像できる。

### 3. 秋保温泉郷の歴史

秋保温泉郷は、古くは秋保温泉、神ヶ根温泉、鴻ノ巣温泉、湯ノ辺田温泉、二口温泉からなっていた。昭和51年に発行の『秋保町史』には全ての温泉記載が見られるが、現在は、秋保温泉と神ヶ根温泉だけが入湯客を迎えるだけとなっている。秋保温泉は、平安時



写真2 秋保湯元・湯神社

代には「名取の御湯」として知られており、寛延4年(1751)に仙台藩の医師那波青陽が記した「秋保温泉記」には、第29代欽明天皇が在位中(531年～539年)に皮膚病に感染し、八方手を尽くして治療を行ったものの一向に治らなかったが、秋保温泉の湯を搬送させ沐浴したところ数日で全快したとある。天皇はその喜びを歌に「覚束な雲の上まで見てしかな鳥のみゆけば跡はかもなし」(な鳥のみゆ=名取の御湯)と詠んだという。以後、秋保温泉は皇室の御料温泉の一つとして位置づけられた。この時代に認知されていた秋保温泉。その発見は有史以前であるとも考えられてもよさそうである。

ではいつの時代か。参考になるのは、温泉の周辺に古えの集落跡があるかどうか。古えに生きた人びとは、温泉を利用するためにその近くに集落をつくったとは考えられないだろうか。秋保温泉付近には縄文時代の遺跡が多数存在する。秋保に生活した縄文人たちも温泉を利用していたと考えたい。

次章では、秋保温泉郷を取り囲む自然環境から秋保地域を概観してみたい。

### 4. 秋保地域を取り巻く自然環境

秋保地域は仙台市の西部、名取川の上流から中流域に広がる山岳・丘陵部に位置している。その上流から馬場、長袋、境野、湯元と続き、段丘面が主な生活の舞台となっている



写真3 秋保湯元・磊々峡

自然環境にも恵まれ、磊々峡や磐司、大滝などは、観光客スポットになっている。

ここで、縄文社会の一大動脈ともいえる名取川について補足したい。名取川の源流は、大東岳・糸岳間の大行沢と糸岳・神室岳間の二口沢であり、秋保から発し生出 - 山田 - 富沢 - 大野田 - 郡山 - 四郎丸の各付近を流れ、名取市閑上の河口まで続いている。特筆すべきは、この名取川流域で多くの遺跡が発見・発掘されているということである。縄文遺跡においては、仙台市域にある約 240 箇所の遺跡のうち、116 箇所が名取川沿いで確認されている（太田 2009）。まさに、名取川流域は縄文社会の中心地といってよいであろう。

以下、秋保地域を横断する名取川上流・中流部の特徴をそれぞれ概観してみたい。

#### ①名取川上流部

名取川流域の上流部は、神室岳は源流・二口溪谷から秋保大滝付近までが範囲である。秋保地域の西部をなすこの地域は、周囲を山に囲まれた山岳・丘陵部にあり、秋保のシンボルである大東岳・神室岳などがそびえ立っている。馬場地区は秋保地域で最も西に位置しており、江戸時代には出羽山形まで通じる二口街道における仙台藩側の西端の宿駅である野尻と二口の各番所が置かれた。野尻においては、宿駅と同時に仙台藩直轄の足軽が住む集落でもあった。二口街道は、海沿い塩釜から仙台を抜け出羽山形に通じる「塩の道」の役目を持つ重要な古道であった。温泉としては、最近まで二口温泉があったが、現在は閉鎖されている。

#### ②名取川中流部

名取川流域の中流部は、秋保大滝付近から秋保地域 - 生出地域 - 西多賀地域を範囲とし、緩やかな山地・丘陵地帯となっている。秋保地域は、名取川両岸に河岸段丘が発達しており、その平坦面に東部馬場・長袋・境野・湯元の各集落が連なっている。多くの縄文遺跡

がこの名取川中流部に集中しており、画期的な縄文の舞台となっていたことがうかがえる。

### Ⅲ. 秋保地域の縄文



写真4 秋保の縄文土器（秋保里センター展示）

#### ①秋保湯元地区の縄文遺跡

##### a. 釜土遺跡（遺跡地図番号 29）

- ・住所：秋保町湯元字釜土
- ・立地：段丘 ・現況：畑
- ・時期：縄文時期不明
- ・遺物：石鏃



写真5 釜土遺跡周辺

b. 行沢遺跡（遺跡地図番号 28）

- ・住所：秋保町湯元字行沢
- ・立地：丘陵麓 ・現況：畑／山林
- ・時期：早期・前期／弥生
- ・遺物：縄文土器片／石鏃／凹石／弥生土器



写真6 行沢遺跡周辺

c. 大夫原遺跡（遺跡地図番号 27）

- ・住所：秋保町湯元字大夫
- ・立地：段丘 ・現況：畑
- ・時期：前期・中期
- ・遺物：縄文土器片・石鏃・石匙



写真7 大夫原遺跡周辺

d. 細野原遺跡（遺跡地図番号 25）

- ・住所：秋保町湯元字細野原
- ・立地：段丘 ・現況：水田・畑

- ・時期：中期
- ・遺物：縄文土器片・石皿



写真8 細野原遺跡周辺

②秋保境野地区の縄文遺跡

a. 羽山遺跡（遺跡地図番号 24）

- ・住所：秋保町境野字羽山



写真9 羽山遺跡周辺

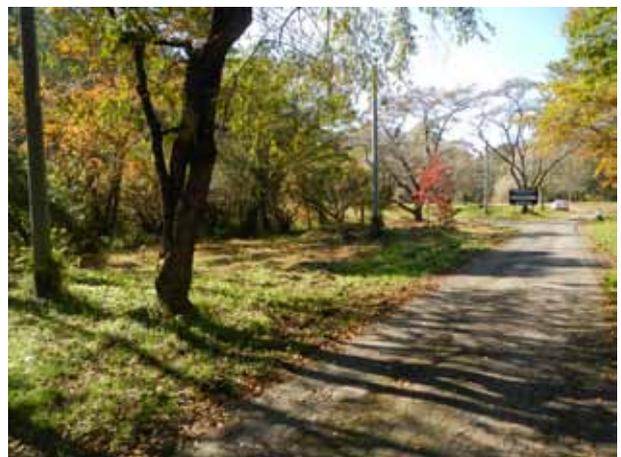


写真10 羽山遺跡の奥・神ヶ根温泉入口付近

- ・立地：段丘　・現況：畑
- ・時期：中期～晩期
- ・遺物：縄文土器片

b. 浜井場遺跡（遺跡地図番号 26）

- ・住所：秋保町境野字浜井場
- ・立地：丘陵麓　・現況：畑・山林
- ・時期：前期・中期
- ・遺物：縄文土器片・石鏃



写真 11 浜井場遺跡周辺

c. 境野遺跡（遺跡地図番号なし）

- ・住所：秋保町境野字野尻
- ・立地：段丘　・現況：畑
- ・時期：縄文時期不明
- ・遺物：縄文土器片



写真 12 境野遺跡周辺

d. 山田遺跡（遺跡地図番号なし）

- ・住所：秋保町境野字山田
- ・立地：段丘　・現況：畑
- ・時期：縄文時期不明
- ・遺物：縄文土器片



写真 13 山田遺跡周辺

e. 野尻遺跡（遺跡地図番号 23）

- ・住所：秋保町境野字野尻
- ・立地：段丘　・現況：畑・山林
- ・時期：後期／奈良／平安
- ・遺物：縄文土器片・土師器・須恵器



写真 14 野尻遺跡周辺

f. 中原遺跡（遺跡地図番号 22）

- ・住所：秋保町境野字中原
- ・立地：段丘　・現況：畑
- ・時期：前期・中期／古代
- ・遺物：縄文土器片・土師器



写真 15 中原遺跡周辺

#### IV. 秋保温泉郷を歩いてみて

今回、温泉街である秋保湯元周辺を実際に歩いてみて、このエリアが名取川周辺に広がる原始からの各集落への食料供給基地ではなかったかと思えるようになった。その根拠は温泉の泉質にある。つまり、秋保温泉の主要な泉質である塩化物泉に含まれる塩分を求め、狩猟動物などが温泉に自然に集まって来たのではないかと考える。この説は、前述した奈良県立橿原考古学研究所の橋本裕行氏により紹介されている(橋本 2014)。温泉の自然湧出数も宮城県は多い。秋保地域も該当するだろう。このことからその可能性はあるのではないか。温泉が狩猟動物を招き、狩猟動物が縄文人を招く。縄文人が温泉を直接利用したとは言い切れないが、間接的には利用したことにはなるのではないか。現在のところ、秋保地域は調査が行われていないので推測の域を出ないが、季節により定住地を変えていたことも考えられる。名取川中流から下流域に生活した縄文人は、夏は中流から下流域に生活し、冬は中流から上流にかけての温泉域に移動、生活したのではないだろうか。狩猟動物も冬季には温泉周辺に集まってきたはずである。この「夏のムラ」と「冬のムラ」の存在は、掃除山遺跡(縄文草創期/鹿児島市)や柗ノ原遺跡(縄文草創期/鹿児島県加世田市)でも知られている(松本 2005)。

名取川周辺の縄文集落は、秋保温泉郷と温泉付近に群がる多数の狩猟動物の恩恵を受けていたと推測した。秋保温泉郷という温泉があったからこそ、狩猟動物が多数存在したのである。繰り返すが、名取川沿いに縄文集落が多数存在した理由には、名取川という河川と、その周辺に広がる自然環境、そして秋保温泉郷という温泉の存在を強調したい。

また、温泉の周囲に集落ができた理由として、先に見たように、縄文人が神の宿る場として温泉を崇めていたであろうことも指摘しておきたい。温泉に浸かることにより傷も治り、疲労した体も癒される。縄文人はこの不思議な力を持つ温泉を神聖な場と考えていたと、自然を神とした縄文人には十分考えられることではないか。現在でも、各地の温泉に温泉神社や薬師が祀られていることから想像がつく。水場が原始からの禊の場であったことから関連性は高いといえる。このように、縄文人の精神が込められる温泉こそが、現代の温泉のルーツと考えたい。

#### V. おわりに

これまで、温泉が考古学的に調査されてこなかったことを知った。本報告書は、温泉が考古学的に調査・研究されることへの提案であり、願いでもある。考古学を研究するにあたっては、いくつもの仮説を立てることが重要といわれる。そこで、今回は大胆にもその意に沿って報告させていただくこととした。温泉の考古学的調査・研究は温泉地の活性化につながるものであり、新たな観光資源としても有効であろう。なにしろ、縄文の人々が生活していた秋保で、その当時のことを思いながら温泉に浸かる。なんとも格別な思いがしてくるのではないだろうか。必ずや温泉地への集客が期待できる施策にもなるはずである。秋保温泉郷を抱える秋保地域は、これまでの温泉資源と自然環境資源に、縄文という新たな資源を融合させることにより、ますます

■秋保地域の縄文遺跡



第1図 秋保地区の縄文時代遺跡（太田 2009 に加筆）

第1表 秋保地域／その他の縄文遺跡（表中の番号は、前項遺跡地図に対応）

秋保・馬場地区の縄文遺跡

番号	遺跡名	住所	時期	主な出土物
1	マンゴク山遺跡	馬場字滝原	中期／古墳	縄文土器片・石鏃・石匙・土師器
2	滝ノ原B遺跡	馬場字滝原	早期～晩期	縄文土器片・石匙
3	森安遺跡	馬場字大椏	縄文時期不明／古墳～	石鏃・土師器片・須恵器片
4	深野遺跡	馬場字深野	後期・晩期	縄文土器片
5	辺田圃遺跡	馬場字辺田	縄文時期不明／古墳～	石匙・土師器片・須恵器片
6	五輪原遺跡	馬場字竹林	晩期／弥生	縄文土器片・石鏃・弥生土器片
7	土蔵田遺跡	馬場字土蔵	縄文時期不明／古墳～	石鏃・石匙・土師器片・須恵器片

秋保・長袋地区の縄文遺跡

番号	遺跡名	住所	時期	主な出土物
8	上ノ原遺跡	長袋字上ノ原	中期	皮袋形土器
9	水上南遺跡	長袋字水上南	縄文時期不明	縄文土器片・石鏃・石匙
10	賀沢遺跡	長袋字賀沢	縄文時期不明	石器
11	清水久保遺跡	長袋字清水久保	中期	縄文土器片
12	青木遺跡	長袋字青木	縄文時期不明	縄文土器片
13	大原遺跡	長袋字大原	晩期	縄文土器片
14	並木遺跡	長袋字中原他	後期・晩期	縄文土器片・石鏃・石匙
15	原遺跡	長袋字原	中期～晩期	縄文土器片・石棒・石鏃・石匙
16	阿弥陀遺跡	長袋字原	縄文時期不明	縄文土器片
17	町上原遺跡	長袋字町上原	縄文時期不明	縄文土器片
18	町南裏遺跡	長袋字町南裏	縄文時期不明／古墳～	縄文土器片・土師器片・須恵器片
19	竹ノ内遺跡	長袋字竹ノ内	縄文時期不明	縄文土器片・石鏃
20	竹ノ内東遺跡	長袋字竹ノ内東	縄文時期不明	石器
21	菅刈山遺跡	長袋字菅刈山	中期・晩期	縄文土器片・石鏃・石匙

す魅力的な地域へと変わっていくに違いない。今回の報告により、秋保地域が新たな視点で脚光を浴びることができれば幸いである。今回の秋保湯元・境野地区の考察を導入とし、今後は、今回歩けなかった長袋・馬場地区の縄文遺跡を考察することにより、秋保地域の縄文の全体像が見えてくるのではないかと考えている。考古学の命題、「仮説を立

てることが重要である」を胸に、ささやかな挑戦ではあるが、秋保の縄文に迫っていきたい。そして、秋保地域から温泉遺構が発見されることを期待したい。

最後に、この一年間お世話になった地底の森ミュージアム職員の皆様、そして直接ご指導いただいた佐藤先生に御礼を申し上げます。

#### 引用・参考文献

- 秋保町史編纂委員会編 1976『秋保町史／本編』 宮城県名取郡秋保町  
石川理夫 2003『温泉法則』 集英社新書  
石井理夫 2006『温泉巡礼』 PHP研究所  
上田 篤『縄文人に学ぶ』 新潮新書  
太田昭夫 2010「名取川流域の縄文時代と自然食材」『地底の森ミュージアム・縄文の森広場研究報告 2009』  
岡村道雄 2014『縄文人からの伝言』 集英社新書  
神崎宣武 1992『湿気の日本文化』 日本経済新聞社  
神崎宣武 1988『クセの日本文化』 日本経済新聞社  
工藤雄一郎／国立歴史民俗博物館編 2014『ここまでわかった 縄文人の植物利用』 新泉社  
新潮社編 2014『青森縄文王国』 新潮社  
仙台市教育委員会文化財課 1990『仙台市文化財パンフレット第21集 名取川と遺跡』  
仙台市教育委員会文化財課 1988『仙台市文化財パンフレット第17集 秋保の文化財』  
仙台市史編さん委員会編 2014『仙台市史／特別編9・地域誌』 pp344～381 仙台市  
田山花袋 2008「温泉のいろいろ」『温泉めぐり』 p 11 岩波文庫（1926 底本・改定増補『温泉めぐり』 博文館  
勅使河原彰 2013『縄文時代ガイドブック』 新泉社  
日本温泉協会 2011『日本温泉協会80年記念誌』 日本温泉協会  
能登 健 2011『列島の考古学 縄文時代』 河出書房新社  
橋本裕行 2014『科学研究費助成事業研究成果報告書 2009～2011 温泉の考古学的研究』  
浜田青陵 1990『考古学入門』 講談社学術文庫  
原河英二 2014「名取川上・中流域における縄文時代の遺跡について」『地底の森ミュージアム・縄文の森広場研究報告 2013』  
平島裕正 2010『ものと人間の文化史7 塩』 法政大学出版局  
藤森栄一 1969『縄文の世界』 講談社  
藤森栄一 1999『古道』 講談社学術文庫  
古川 顕 2014「温泉とは何か」「温泉の歴史」『温泉学入門』 pp12～77 関西学院大学出版会  
松本直子 2005『先史日本を復元する 縄文のムラと社会』 岩波書店  
宮城県教育委員会編集 2011『宮城の遺跡100』 (財)宮城県文化財保護協会  
茂木健一郎・山崎まゆみ 2014『お風呂と脳のいい話』 東京書籍

# 是川中居遺跡にみる縄文琴とその再現について

西村尚純

## I. はじめに

人としての心の豊かさの一つである音について、縄文人はどのように生活の中に取り入れていたのか興味を持っていた時に、仙台市縄文の森広場で行われている企画「縄文のまつり復元と創造プロジェクト」の中で、『縄文琴の研究』（鈴木克彦編）に出会い、一度再現してみたいと思うようになった。

しかし、『縄文琴の研究』を読んで出土籠形木製品が「縄文琴」=弦楽器であったか、あるいは他の道具であったかは議論の中にある。私の当研究のタイトルでは「縄文琴」と記したが、以下「縄文琴=弦楽器」とは断定せずに、仮に籠形木製品が弦楽器であったとの仮説の下にその可能性について研究を進めてみる。

## II. 研究目的

- (1) 是川中居遺跡から出土した籠形木製品を縄文時代の道具を用いた製作方法を想像し、再現を試みる。
- (2) 再現製作の際に生ずる諸問題を明らかにする。
- (3) 籠形木製品が弦楽器と仮定するならば構造上の問題点は何か。
- (4) 籠形木製品が弦楽器と仮定するならば弦と弦の張ることに問題はないのか。
- (5) 籠形木製品が弦楽器と仮定するならば楽器として機能するのか。
- (6) 籠形木製品が弦楽器と仮定するならばあったであろう構造上の失われた要求物は何かあるのか。
- (7) 以上(1)～(6)までを組立てた時に籠形木製品は弦楽器として演奏は可能なのか。

## III. 研究内容

### (1) 文献の調査

『縄文琴の研究』を読み研究対象の絞込みをする。

### (2) 研究対象の絞込み

籠形木製品の中から「No.1 籠形木製品」を研究対象とする。

出土籠形木製品No.1～No.20まで20本の中から「No.1 籠形木製品」を選んだ理由は

- ・完全形で出土していること。
- ・胴下端部先端に孔、刻みがないこと。
- ・胴部上半部に一個の開口部直径0.6cm 中心直径0.3cmの貫通小孔がある。
- ・胴下端部先端から3.6cmの右側面部に間口0.3cm 奥行き0.6cmの溝がある。

No.1～No.20の籠形木製品の中でNo.1 籠形木製品が弦楽器として最も対応しにくい籠形木製品であるとみられるので、このNo.1 籠形木製品でも弦楽器としての可能性があることを証明することが必要であると考えて研究対象とした。

### (3) 製作図面の作成

是川中居遺跡の縄文学習館を訪ねたが、ガラス越しに見る籠形木製品からは何も解らず、結局は『縄文琴の研究』中の縮尺図及び、解説内容から図を作成した。

#### (i) 図面

文献図より $S = 1/4$ と記載があるので、文献図を4倍に拡大して図面とした。

#### (ii) 寸法

文献記載の数字で補正をした。

長さ54.1cm、幅6.5cm、厚さ0.9cm

### (4) 製作図面から浮び上がった課題

製作する前に以下4点を推定してみる。

#### (i) 寸法、形、構造について



(イ) 長さ (54.1cm)、幅 (6.5cm) については持ち抱えて弾く場合には身体にとって持ちやすい大きさである。下に置いて弾く場合には小さすぎて固定がむずかしい。ここでは、持ち抱えて弾くことが前提と推定した。

(ロ) 厚さ (0.9cm) は弦の太さにもよるが、太い弦を使用したと推定されるので、直径 0.3cm の弦を張ると表側の弦と裏側の張り紐にかかる負荷は非常に強く、その力に耐えるために 0.9cm は必要であったと考えられる。また、あまり厚くなると音の共振が弱くなるので音と力のバランスのとれる限界の薄さと考えられる。

(ハ) 胴上半部肩長さ 6.3cm 幅 6.5cm の四辺形部は二本のハの字形頭頂部突起の弦の起点から肩四辺形部を経て二等辺三角形胴部へと続く弦を支える重要な部分となっている。肩四辺形部の下端 (板厚 1.1cm) と胴二等辺三角形の始まり (板厚 0.9cm) では 0.2cm の段差があって、そこにブリッジ (柱) が置かれていたのではないかと推定される。

(ニ) 二等辺三角形の始まりにはブリッジが配置され、ハの字形頭頂部から二等辺三角形の下端部へ張られた弦は、胴下端部から 3.6cm の距離の所にある間口 0.3cm 奥行き 0.6cm の溝の横板中央で巻紐によって巻いて

固定される。(弦の張り方、固定の仕方は後述する) すなわち、胴下端部に孔や刻みがないので弦を張るためには二等辺三角形である必要があった。また、胴下半部は左手で (右利きの人は) 握り、指で弦を押さえやすい太さにするためと推定される。

音の共振を考えると理想的には板厚は薄く、板幅は広い方が良いが、弾く方からみると胴下半部は細く握りやすく指で弦を押さえやすい寸法とし、胴上半部は孔位置辺りを弾くと一番響きが良いので、右手で弾きやすい板幅寸法が決められたと推定される。すべて経験から決められた寸法だと思う。板材、長さ、幅、厚さ、弦の糸材、太さ、張り、ブリッジ (柱) の高さ等が、すべて関連している。

従って、再現するためには板材・寸法・弦の糸材をカラムシの撚り糸とすると、調べることは弦の張りとはブリッジ (柱) の構造と高さになる。

(ホ) 胴部かまぼこ形断面については、弦の弾きやすさ、弦の手指での押さえやすさから、経験的にかまぼこ形になったと推定される。現代の弦楽器でも、弦と相対する板の断面はかまぼこ形に湾曲している。

(ヘ) 頭頂部ハの字形突起は弦の起点としての役目を持ち、それぞれ二箇所の刻み溝は、弦の誘導の溝になっていて、表の弦を裏の弦の張り紐に繋ぎ弦がハズレないように誘導し、固定するためである。また、首の部分が括れているのは、その部分で巻紐を 2、3 回巻いて弦のズレや緩みを押さえ、且つ、刻み溝から弦がハズレないように固定するためであったと推定される。括れ部で弦を押さえることによって非常に安定して使いやすくなっている。また、ここで巻紐を巻締めても、弦を引っ張って強く張る動作に邪魔にならず、張りを増すことができる。これは張り方が表側と裏側の張り紐による方法を裏づけるために必要な構造であったと推定される。

(ト) 胴上半部直径 0.3cm の貫通小孔につい



ては、弦楽器とすれば共鳴孔ではないかとの推論があるので、今回小孔のないものを作って比較してみることにした。

共鳴孔とした場合、共鳴構造体が必要になるので、共鳴構造体も準備して比較することにした。

(チ) 胴下半部については、弦の糸を張る際に、一方の端を輪結びとし、輪の大きさは切り込み溝の下で止まる大きさとして、出来るだけ小さい方が良い。輪は下部先端より挿入し、もう一方の端はハの字形突起を経て裏側に回す。次に弦の張り紐を用意し、一方の端は小さな輪結びを作り、同じように輪を下部先端より挿入して、紐の端を裏側に回して、頭頂部を経由した弦の糸と結合し、締めて強く張る。このとき、切り込み溝で巻紐を2、3回巻いて弦を固定させると同時に弦の長さを頭頂部の括れ部巻紐から胴下半部切り込み溝部巻紐までの長さを固定する役目をもって、この溝は絶対に必要なものである。これが動くと、弦の長さが変わり、音が変わってしまう。頭頂部突起括れと、胴下半部切り込み溝は、弦の位置が動かないようにするために必要である。頭頂部突起括れと、胴下半部切り込み溝は。このとき、巻紐を巻く際、表側の弦の糸と裏側の張り紐を同時に押さえることによって弦の糸や張り紐が緩まず、張りの強弱をコントロールできる。

## (ii) 材料の選定

板材：板材は強力な弦の張りの力に耐え、反りや曲がり不起き材料とし、且つ密度が

高く、乾燥に耐える材料が必要とされる。『縄文琴の研究』によるレプリカの板材はスギやヒバを使用しているが、スギ材は板質が柔らかく乾燥時のヒビが入りやすい。また、楽器用材質としては密度が小さいので響きがよくない。そこでヒバに近い材質として、縄文の森広場の薪材にカラマツがあり、丸太の分割材を乾燥させて用材とした。

弦の糸材：縄文時代の弦の糸の材料として現在入手出来るものとしてカラムシが文献にのっていたので、カラムシの撚り糸を弦の糸とした。カラムシは縄文の森広場で用意出来た。また、比較検討のため以下のものを用意した。

	弦の糸材	糸の直径
1	カラムシ(麻)	0.5mm
2	カラムシ(麻)	1mm
3	タコ糸(綿)	0.5mm
4	タコ糸(綿)	1mm
5	マクラメ糸(レイヨン)	3mm

張り紐：張り紐は弦を裏側で引き締める紐で、弦よりも力が加わるので今回は弦の糸よりも太い直径3mmのマクラメ糸の撚り紐(弦の糸上記表5と同じもの)を用いた。

巻紐：張り紐と同じものを用意した。

弦の張りをコントロールするリング：弦の張りの強弱をコントロールするためのリングには鹿角を用いた。貝殻でも満足するものであったが、鹿角の方が加工しやすいので鹿角で実験をした。

ブリッジ(柱)：軽く、音の響きの良い、板材と同じ、カラマツ材を用いた。

共鳴構造体：縄文時代にひょうたんやカラスウリのような野生のウリがあったと言われている。ひょうたんを材料としたかったが、手に入らなかったため、カボチャの果皮を乾燥させて用いた。参考までに小玉スイカも用意した。

### (iii) 製作方法の想定

胴部板：はじめに縄文時代の石器で造り再現することと、そこから見えてくる諸問題を研究目的の一つとした。そのため頁岩を用意し、カラマツの薪材を加工し始めるが、刃先が毀れ何度も交換を要した。加工に適した石器を作ることに時間を要することから、石器での再現は次回とした。今回は石器、鉋、砥石での再現は次回とした。今回は石器、鉋、砥石で形をつくり、肩部模様の輪郭部のみカッターナイフを用いた。石器だけでつくることの大変さが実感できた。石器の鋭さだけではなく、加工する場所により刃先の鈍さが必要なことが解った。その角度を加工の部位に合わせた石器が必要だった。

### (iv) 弦楽器であればあったであろう物

出土していないが弦楽器として必要なものはブリッジ（柱）である。これがないと弦を弾けない。もし、直径 3mm の孔が共鳴孔とするならば共鳴構造体があったと考えられる。また、弦の張りを逐一結びをほどいて締めなおし、また結ぶという煩わしさをしていたとは思えない。そこは経験的に自由に締め付けが出来る方法を見つけていたと思われる。従って、ブリッジ（柱）、共鳴構造体、はあったと推定される。また、弦を張る方法として、紐で締め結ぶか、コトロール・リングで締めるか、していたと想像されるから、これもあったと推定される。

### (5) 製作と検討

#### (i) 胴部板の製作

当初計画の縄文時代の道具による再現は前述の理由により次回に再現することとし、今回は以下の道具を用いて製作した。

#### 加工順序

- 1) カラマツ材を鉋で粗成形し板状にする
- 2) 粗成形された板を左右二等辺三角形に鉋で形づくる。このとき鉋で長さ 54.1cm の寸法出しをする。
- 3) 砥石で板厚を 0.9cm で、断面がかまぼこ形になるように削る。



4) 二等辺三角形の角部は石器（頁岩）で削り、角をとる。

5) 直径 0.3cm の孔はキリで開け、開口部直径 0.6cm は石器（頁岩）で削り、調整する。

6) 頭頂部への字形突起は鉋と石器で形づくる。

7) 文様はカッターナイフで輪郭をとり、石器で彫る。石器では年輪の堅い部分が切れず、カッターナイフでの模様輪郭の切り込みが必要であった。

今回、胴上半部の小孔および胴下半部の切り込み溝の有無の二本を製作した。

#### (ii) 弦の糸の製作

カラムシの繊維は縄文の広場で栽培し、繊維を取り出したものを使用した。

#### 加工順序

- 1) 一度撚った糸を二本作る。
- 2) この二本を更に撚って一本の弦の糸とした。

直径 1mm と直径 0.5mm の撚った弦の糸が完成したが、糸の太さが一定に、均一には

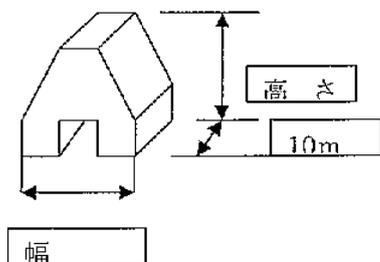


出来ず、太い所、細い所が出来てしまった。均一にするのは難しい。音への影響が心配だ。

### (iii) ブリッジ（柱）の製作

ブリッジはまだ出土していないが、ブリッジがなければ弦はただ胴板をたたきだけで弦としての響きは得られない。ここでは、ブリッジがあったものとして考えた時、どのようなブリッジがあったのか想像してみる。材料は軽くて、密度が高い材質の板が適しているが、今回は胴部板材と同じカラマツを用いて実験をした。

[実験1] 最初に用意したブリッジはたて長の台形をしたブリッジを作ってみた。



脚部は胴板表面がかまぼこ形に湾曲しているので、中央部はくり抜いて二脚とした。

高さは最初 30mm と高くしておいて、5mm ずつ高さを下げて音の響きを調べた。

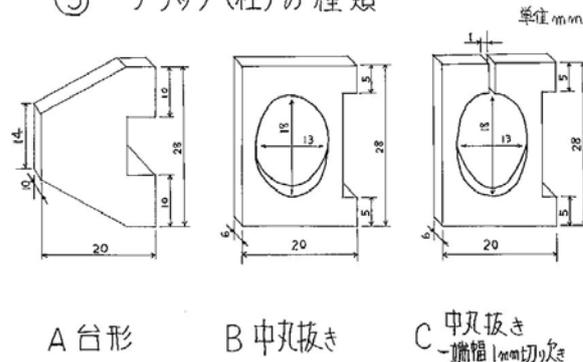
使用した弦の糸の直径 1mm

高さH	音の響き	弦の張り
30mm	△	×張りすぎ
25mm	○	△少しキツイ
20mm	◎	○
15mm	○	△少しゆるい
10mm	×	×

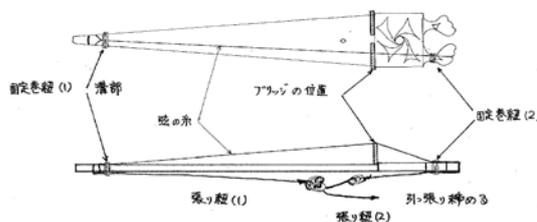
### [実験2]

ブリッジの高さを 20mm としたときにどのようなブリッジの形がよいか比較試験をする。(A) 台形で高さ 20mm のもの、(B) ブリッジの重量を下げるため、ブリッジの中央を丸く抜いてみたものと、更に、(C) ブリッジの中央を丸く抜いた一方の端に幅 1mm の切り込みを入れたものを用意した。

### ⑤ ブリッジ(柱)の種類



### ⑤ ブリッジの位置



形状	音響	音響
	弦直径 1mm	弦直径 3mm
A	△	△
B	○	○
C	◎	◎

音の響きは中央を丸く抜き、切り込みを入れたものが一番よく板が共振し、音の響きも良く観察された。

### (iv) 共鳴構造体の製作

1) 準備：二つ割りのカボチャと二つ割りの小玉スイカを用意した。

2) 果肉の除去：中の果肉をスプーンで抉り取り、果皮のみにした。

3) 乾燥：天日にて毎日乾燥させた。二つ割りのもう一方を冷蔵庫内にて乾燥を試みたが果皮上端部が腐敗し、失敗した。天日乾燥の方がよいことが分かった。小玉スイカは水分が多く、収縮率も大きく、乾燥前に形が崩れてしまった。カボチャは三ヶ月かけて十分な強度に乾燥出来た。但し、水分除去のために、一時新聞紙を果皮内部に詰めたことが黒カビ

の発生をまねいたことは反省であった。

4) 完成：強度は十分だが、果皮が若干厚いこと、カボチャの形状から、凹凸があることで、音の振動にどのように作用するか心配であった。



5) 胴板への取付け方法：胴板への取付けのため、左右二箇所穴を開け、紐で固定するようにした。取付け位置は小孔の真下中央とした。



[実験1] それぞれの胴板に共鳴構造体を付けないで比較した。

直径 0,3cm の孔の有無で両者に大きな差は観察されなかった。

共鳴構造体無	音の響き	板の共振
直径3mm孔有	○	○
直径3mm孔無	○	○

[実験2] 胴板の直径 3mm の孔有りについて共鳴構造体の有無で比較した。

共鳴構造体有りの方が音の響きが大きくなり、差があることが分かった。

直径3mm孔有	音の響き	板の共振
共鳴構造体無	○	○
共鳴構造体有	◎	◎

[実験3] 胴板に直径 3mm の孔無しについて共鳴構造体の有無で比較した。

共鳴構造体有りの方が音の響きが大きくなり、差があることが分かった。

直径3mm孔無	音の響き	板の共振
共鳴構造体無	○	○
共鳴構造体有	◎	◎

[実験4] それぞれの胴板に共鳴構造体を付けて比較した。

胴上半部の直径 0.3cm の孔について、孔の有無で差は観察されなかった。

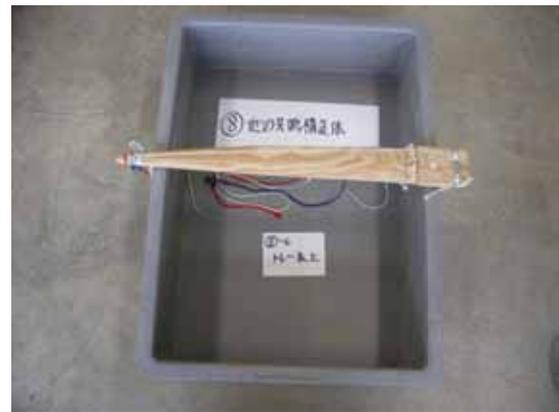
共鳴構造体有り	音の響き	板の共振
直径3mm孔有	◎	◎
直径3mm孔無	◎	◎

今回の試験では直径 0.3cm の孔の有無による差は観察されなかったが、共鳴構造体の形状、大きさ、材質等によっては差が出るかも知れない。

[実験5] 他の共鳴構造体ではどのような音の響きの変化が観察されるのか試験を試みた。

実験に用意した他の共鳴構造体名を音の響きの順番に並べてみた。

音響順	共鳴構造体の種類名
1	作業トレーを伏せた裏の上
2	縄文太鼓の上 (豚皮張り)
3	作業机の上
4	今回のテスト品 (カボチャ)
5	木製板の上
6	作業トレーの表の上
7	縄文土器壺の上



実験結果として共鳴構造体があると音響効果が大きいこと、また、閉じた空間状（空洞）のものがよいことが分かった。また、この縄文の篋形木製品でも共鳴構造体があれば弦楽器として単独で演奏出来る音の響きが得られることが分かった。

#### (v) 弦の張りをコントロールするリングの製作

常時緩む、弦の張りを維持するために縄文人はどのようにしていたのか。弦の張りを維

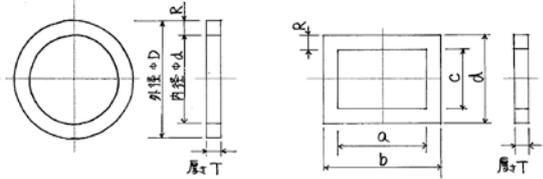
持するための道具があったのか。研究目的の一つである、弦の張り方に大きな影響を与えることになるので、必要な道具を推定した。その道具は鹿角のリングである。使用方法は後述「実際に弦をはってみる」に記す。

1) 材料：鹿角、または貝殻である。貝殻は加工し難いので、今回は鹿角を用いた。大きいものが手元にないので小さいものしか出来ず、強度が心配だった。

2) 形状・寸法：リングの大きさは適当であ

る。強度が保てれば多少大きくても、使用上は問題ない。リングの穴は弦の糸や弦の張り紐が通る穴の大きさであればよい。

⑨ 鹿角リング図



形状は丸形、角形、三角形、楕円形でも良く、比較的自由です  
 例1) 弦の糸の直径 1mm の場合  
 リングの内径  $\phi d$  及び長さ  $a, b, c, d$  は 4mm 以上、リングの輪  $R=3mm$  以上、厚さ  $T=3mm$  以上  
 例2) 弦の糸の直径 3mm の場合  
 リングの内径  $\phi d$  及び長さ  $a, b, c, d$  は 6mm 以上、リングの輪  $R=5mm$  以上、厚さ  $T=3mm$  以上

3) 使用数量：一本の弦に 2 個（弦が太い場合）、または 3 個（弦が細い場合）

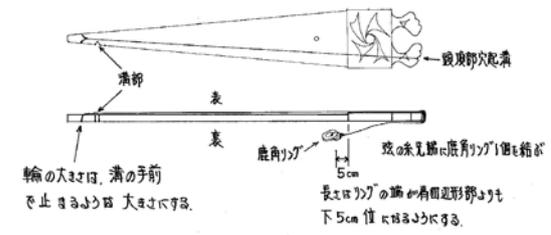
(VI) 実際に弦を張ってみる。

頭頂部ハの字形突起の溝の数から弦は 2 弦～4 弦が可能であった。ここでは 1 本の弦の張り方を説明する。弦が 2 本でも、3 本でも、4 本でも同じ方法で張ることができる。突起の溝の数は 4 個あるが、当時、弦は 2 弦で使われていたのではないかと推定した。

弦の張り方手順

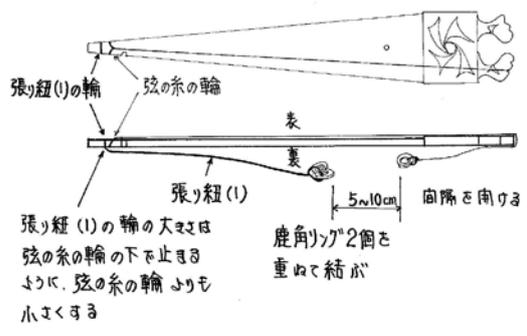
- ①用意するもの：1 本の弦を張るために以下のものを用意する。弦の糸 1 本、弦を引っ張るための張り紐 2 本、弦を固定するための巻紐 2 本、鹿角リング 3 個
- ②弦の糸の一方端部を輪むすびとする。輪の大きさは胴下半部右側面の溝の下に止るように小さい輪とする。
- ③小さい輪を胴下端部より挿入し、胴下半部右側面溝の下で止るように引き上げ、もう一方端部は頭頂部突起の溝を経由して胴板裏側に持って行く。持って行った糸の先端に鹿角リング 1 個を結び付ける。その長さは肩部四辺形の下 5cm 位の所にリングが来るようにする。
- ④同じように張り紐 1 本を用意し、一方端部を小さい輪むすびとして、胴下端部より挿入して胴板裏側に持って行き先端に鹿角リング

⑩ 弦を張る (1)



2 個を重ねて一緒に結び付ける。張り紐の輪は弦の糸の輪よりも小さくし、引っ張り上げた時に弦を押し上げないようにする。張り紐の長さは、鹿角リングを付けた状態で、弦の糸の先端に結んだ鹿角リングとの間が 5cm～10cm になるような長さとする。

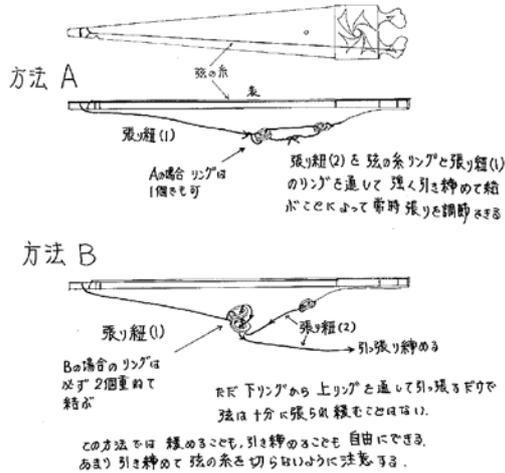
⑪ 弦を張る (2)



- ⑤弦を張り締める。これには A、B 二つの方法がある。2 本目の張り紐を用意する。  
 A) 用意した張り紐で、胴板裏側の弦の糸先端の鹿角リングと 5cm～10cm 隔たった張り紐先端の鹿角リングを通して強く締め付け結ぶ方法。これはその都度、結び直す煩わしさがあるが、単純で、容易に出来る便利さがある。  
 B) 用意した張り紐の先端を、胴板裏側に誘導されている弦の糸先端の鹿角リングに結び付ける。もう一方の端を、同じく 5cm～10cm 隔たった張り紐先の重なった 2 個の鹿角リングへ持って行き、下リングから、下リングの内側、上リングの内側を通り、上リングの外側を通して、下リングの内側に戻り通して、紐を引っ張ると、連続で引き締められる。戻り、緩むことはない。ただ上下二枚の

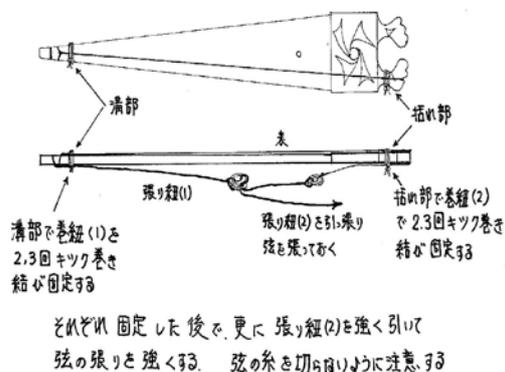
リングの間を紐が通って行くだけの単純な方法である。この方法は容易であり、縄文時代にもあった技術と想像される。

⑫ 弦を引き締める



⑥弦の固定。弦の固定は2箇所ある。そのため、2本の巻紐を用意する。一箇所目は胴下半部右側面溝部である。張られた弦の糸と胴板裏側に張られた張り紐を同時に、巻紐を溝に埋めて強く2,3回巻いてしっかり固定する。二箇所目は頭頂部ハの字形突起部の括れの所である。巻紐を2,3回巻いて弦の糸を表、裏とも強く固定する。これによって、弦は安定し、弦の長さは一定に保たれ、音の安定と持ち運びの安定が保持される。

⑬ 弦を固定する



このように No. 1 篋形木製品は胴下端部に刻みや孔がなくても、弦をはることができた。また、胴下半部右側面溝や頭頂部ハの字形突起の括れは、弦を張るために必要な構造であった。構造上弦楽器として無駄なものはなく、すべて必要な形であった。



IV. まとめ

(1) 研究目的に対する成果

研究目的 (1) (2) は道具 (石器) の準備があり、時間がなく、断念し、次回とした。

研究目的 (3) については、報告してきたように構造的には弦楽器として、頭頂部ハの字形突起、括れ、小孔、胴下半部右側面切れ込み溝、二等辺三角形、すべて必要なものであった。ただ、寸法の板長さ、板幅、板厚だけは経験から決めたものと思われる。

研究目的 (4) については、弦をはるためには、この構造が必要不可欠であり、弦を張ることに何ら問題はなかった。経験的に非常に練り込まれた跡がうかがえた。

研究目的（5）については、まだ未出土のブリッジ（柱）があることが大前提となる。ブリッジがあれば弦楽器として機能する。更に、共鳴構造体や弦を張るリングがあれば、音の響きは良くなり、弦の張りも自由にコントロールが出来て、音階もとれるようになる。

研究目的（6）については、絶対に必要なものはブリッジ（柱）であり、あればよいものは共鳴構造体であり、弦を張るリングがあることが望ましい。今後、出土されることを願っている。

研究目的（7）弦楽器とした場合、演奏は可能なのか：弦を張り、ブリッジ（柱）を立て、共鳴構造体を装着すれば、三味線や琵琶やギターのように脇に抱えて、左手で弦を押さえ、右手で弦を爪弾くことが出来る。弦を押さえる位置で音階が作られ演奏が可能となる。また、弦の張りを維持、コントロールするリングがあれば、音階は安定する。縄文時代でも経験的に可能な技術であったとみる。

## （2）当研究から分かったこと

No.1 籠形木製品は、胴下端部に刻みや孔がなくても弦楽器として使用可能であったが、

「琴」と限定しない方が良いと思えた。ブリッジの構造によっては三味線のような音になり、違うブリッジの構造では琵琶のような音にもなる。また、共鳴構造体によってはギターやウクレレのような抱える弦楽器のようにもなる。従って、ここでは、ただ弦楽器とするのが穏当であろうと思われた。また、この弦楽器はその時代に使用されたものであり、これが後の「琴」や例えば「琵琶」になったと言うことは難しいと思われる。その時代だけの弦楽器と見るべきと思われた。

## V. おわりに

実物を手にすることは出来ないので、すべて『縄文琴の研究』を基に、実際にレプリカを造り、実験をしてみることによって、弦楽器としての可能性を調べた。また、弦楽器としてみた場合に必要な、まだ出土していない部品がいつか発見されることが、更なる裏づけになると思う。

奇しくも、津軽で演奏されているスコップ三味線が縄文の弦楽器の類似性を持っているのが何とも不思議に思えた。

## 引用・参考文献

鈴木克彦 2012 『縄文琴の研究』 弘前学院大学地域総合文化研究所

# 弥生時代のコメづくりについて

## —仙台平野の水田遺構から考える—

沼倉哲郎

### I. はじめに

私の生まれた旧栗原郡若柳町は、遠くの山際まで水田のつづく穀倉地帯であり、江戸時代には迫川～北上川の舟運を利用し、石巻港に米を供給する積出地として大いに栄えたといわれている。小学校時代、田植えや稲刈りの時期になると、半ば公認で学校を休む級友たちを、生家が農家でなかった私は、その作業の苦勞、大変さも知らず、ただ授業が無くていいなと羨ましがった思い出がある。当時、農作業の大半は人手をかけての仕事であり、そのため家族・隣近所の結い仲間が総出で田んぼに繰り出し、それは大層にぎやかで、活気に満ちた、いまとなっては懐かしい光景である。

消費量が落ち込み、米余りといわれる昨今ではあるが、私たちはコメによって育てられた最後の世代であるかもしれない。毎日の食生活は勿論、自分の身体や心のあり様に、稲

作農耕文化の特性が色濃くしみ込んでいる。コメどころである郷里、宮城を知るための出発点として、稲作をテーマにした。

### II. 研究の成果

#### 1. 仙台平野の水田遺跡について

東北地方はその気象条件から、弥生時代には水田稲作がなかったという見解が支配的であったが、これに対し、伊東信雄氏は石包丁や炭化米などの集成を通して、東北においても稲作があったことを証明すべく精力的に研究を続け、それは1981年、垂柳遺跡での中期水田址の発見に結実した(工藤1998)。

仙台市の水田跡調査は、昭和56年、六反田遺跡のプラントオパール分析に始まり、翌57年地下鉄建設にともなう調査において、山口遺跡と富沢遺跡から、中世及び平安時代以前の水田跡が見つけたのが最初であった。「仙台市史」によれば仙台市内の弥生時

第1表 仙台平野における弥生時代の水田遺構・農耕関連資料

遺跡名	所在地	地形環境	水田区域	農耕具	備考
南小泉	若林区南小泉	自然堤防	—	石包丁、石斧	出土土器:甕50%, 壺15%
杵形	若林区荒井	後背湿地	20ha、水口・水路、大小畦畔、方形・長方形の小区画(16~25㎡)、67区画		弥生中期中葉以降の津波の堆積層
中在家南押口	若林区荒井	自然堤防	—	広鋏、狭鋏、泥除、鋤、堅杵、臼	鉢、甕、土壙墓(4)、土器棺墓(1)
高田B	若林区日辺	後背湿地	水路、10~30㎡の長方形が基調の50枚以上の区画	広鋏、平鋏、泥除、斧、膝柄、直柄、堅杵、臼、石包丁	集落跡(周溝をもつピット、柱穴)
郡山	太白区郡山	自然堤防	大畦畔3条	石包丁、石斧	
富沢	太白区富沢	後背湿地	中期:1km四方、大小の畦で区画、5~30㎡の小規模水田が多い	鋏、石包丁	畦畔の沈下防止や溝の護岸のための杭列・材木列(104次)
山口	太白区泉崎	自然堤防	自然流路7条、疑似畦畔、杭列		
船渡前	太白区山田	自然堤防		泥除け、田下駄、石包丁、石斧	初圧痕のある土器破片、80点を超す石鏃
下ノ内浦	太白区長町南	後背湿地	溝跡4条、畦畔3条 耕作地は限定的	石包丁、石斧(副葬)	土壙墓1基、土器棺墓3基
後河原	太白区中田町	自然堤防~後背湿地	14区画、水路1条		1区画 20㎡(推定)
十三塚	名取市	小丘陵		石包丁、石斧	土壙墓14基、土器棺墓1基
鱸沼	角田市	丘陵、東に沖積平地	炭化米18(粒が揃いで、不稔粒も多い)、炭化ク		土器120点のうち、壺3%、甕形土器20%

代遺跡は40カ所余りで、多くが七北田川や名取・広瀬川流域の自然堤防や浜堤に立地し、水田跡は洪水層に覆われた状態で発見されている（仙台1995）。第1表に仙台周辺部の弥生時代の水田遺構・農耕具などの稲作に係る出土資料をまとめてみた。

中在家南遺跡は弥生～平安期の遺物出土層ごとに、様々な種類の木製農耕具が未成品を含め多数見つっている。これらの資料からは、稲作に用いる農耕具の器種構成が明確になったこと、そして未成品から製品になるまでの製作工程がわかったことである（第2図）。更には古墳時代、平安時代と時代経過とともに、農耕具がどう改良されたのか、その変遷をたどれることから、仙台平野の稲作の進み具合をはかる貴重な史料である。

仙台平野の低地遺跡は、水田稲作をはじめ弥生文化への傾斜が、他の東日本地域に一步先んじていた可能性が高いという設楽博己の指摘がある（設楽2005）。それは、山王圀遺跡で縄文晩期週末の環濠らしき遺構や縦杵が発掘されたこと、阿武隈山麓の福島県域を



第1図 泥除けの製作工程の復元（仙台市教委1993）

含めて石包丁の利用が卓越していること、弥生中期後葉の神奈川県池子遺跡から出土した木製鍬の泥除けが、高田B遺跡や福島県連郷B遺跡のそれと形態的に類似していること、また青森県垂柳遺跡で出土した木製鍬の未成品や盾と思われる板、南御山2式系の壺形土器が仙台平野からの流通や技術的関与の可能性などによるものとしている。（設楽2005）

しかしながら、仙台平野では水田跡や農耕具などの出土はあるが、農耕を営んだ弥生人の居住した集落の規模・構造、施設を知るための遺構・遺物は少なく、当時の生業や暮らし全体を総体として知るには不明な点が多いのが実情である（仙台市1995）。

## 2. 仙台平野の弥生期水田稲作

ここでは、富沢遺跡の調査を主に、当時の水田等の状況を検証してみる。

### 1) 湿田から半湿田へ

富沢遺跡は扇状地末端付近の後背湿地にあり、水田直下には分解度の低いヨシを含む泥炭層が堆積し、地下水位が常に高く、かなり湿潤な環境につくられた水田であったようだ。そのため、寺下圀式期には排水を主体とする水利による湿田経営であったが、柵圀式期に入ると寺下圀式期からの排水の効果もあって、灌漑を行なう水利による半湿化された水田へと発展していった（富沢1次）。

北九州に伝来した水田稲作の特徴は①堰と水路という灌漑システムを伴っていたこと ②畦畔で区画され、乾田でも半乾田でも適応できる技術であったこと ③機能分化した木製農具、新たな道具を伴っていたこと ④水田稲作の技術だけでは文化総体が伝播してきたこととされている（禰宜田2000）。

富沢遺跡の水田跡は泥炭質粘土という地質から、①の水路跡は残りにくく、ほとんど見つかっていない。②の乾田とは、現在も普通に見かけるように、水のない畑状態で犁耕を行ない、その後で水を引き、水を湛えた状



第2図 富沢遺跡の水田跡（仙台市教委 1993）

態で作物を育てる、灌漑農法に用いる田圃である。これに対し、当初、富沢遺跡は、地下水位が高く、排水が必要な、かなりぬかるんだ、浅い沼のような、田圃であったとされる。いわば、灌水農法—いつも水田に水をたたえた状態—であり、そのことは古墳時代に出土した田下駄や周辺の遺跡から出土した泥除けのついた鍬からも類推される。

縄文晩期以前に、水が豊富な河川敷や湖畔を火入れ開墾したり、窪地や天水田などを利用したイネ、雑穀の混作による焼畑稲作が提唱されているが（佐藤 2002）、富沢遺跡の初期の状況をみるに、そのような水陸未分化の稲作、或は雑穀類の栽培が先行して、部分的に行われていた可能性も考えられる。

## 2) 小区画水田であった

水田跡は等高線に対して、平行、直交する大畦畔で大区画をつくり、そのなかを小畦畔で細分する形で区画され、多くは30㎡以下の小規模な水田である（富沢 35次）。

登呂遺跡の水田の形態（1区画375～2396㎡）を代表例として、弥生時代の水田がかなり大規模であると誤認されてきたが、近年の発掘調査の精度が高まり垂柳遺跡などのような、小区画水田が基本となった。（伊藤 2005）これは地形の勾配に合わせて、区画の造成にかかる労力—水田を平たんにする—を省くため、冷水を避け初期のイネの育

成を助ける工夫とされているが、その他人力での耕作という作業能力や粃を直播したなどの理由もあげられる。

## 3) 休耕田・不耕田があった

水田は何度か中断期があり、中断の前後で大畦畔（大区画）を踏襲する場合と、別の場所に大畦畔を造り替える場合とがある。また、中期中頃以前から後期にかけて、8期にわたり水田が営まれていたが、1地点の調査で8期の水田跡が見つかった例はなく、多くて6期である（富沢 35次）。

弥生期に伝来した稲作は休耕田（不耕田も含めて）を伴う農法であったという。北九州に水田稲作をもたらした朝鮮半島の無文土器時代の水田の特徴は、早地農法と休閒農法であり、地力や雨量などが充分ではない古代においては、水田や畠の休閒は避けがたい通常農法であった（早地農法＝ひとつの農地を雨の多い年は水田として、旱魃の年には畠として利用され、ソバやヒエなどの救荒作物を作付すること 伊藤 2005）また、古代から中世までの水田には似たような「かたあらし」と呼ばれる技術があった。これは土地が荒れるために一年耕作すると、次の年に耕作をやめる（土地を休ませる）やり方で、連作による収量低下の回避や雑草への対策などの理由が考えられる。実際、断片的な文献資料数字からでも、中世に至ってもなお、私有地であった荘園や寺領内にさえ、相当量の不耕田があったことが検証されている。弥生時代の水田遺構は、多くの場合、開田しては廃絶し、また土地を田に開くということを繰り返していた（佐藤 2002）。

中在家南遺跡で農耕木具が発見された場所が旧河道跡であったように、仙台平野は土地の標高差が小さく、ほぼ平坦なまま海岸部に至る地形から、広瀬川・名取川水系では丘陵から一気に流れ落ちる河川が、大雨のたびに氾濫し、田畑に灌水する災害が繰り返されたと想定される。

加えて杵形遺跡の発掘に際して、弥生時代と古墳時代の耕作層の間の5 b層に津波堆積物が確認され、2000年前の弥生中期に仙台平野に津波が到来し、当時海岸から2.5 kmの位置にあった杵形遺跡の水田は全滅したということが判明している（仙台市1995）。

このような自然災害、経年的な地力の低下、また当時のイネはこぼれ落ちやすいなど多くの困難があったはずである。それでも、古墳時代前期には再び水田稲作を始めたといわれる。何がコメづくりを継続させたのだろう。

### 3. 弥生期（以降）稲作の概況

#### 1) 背景としての気候変動

ここで、稲作りに大きな影響を与える、当時の気候を検証してみる。寒冷期が一時的にゆるんで温暖化が進んだ紀元前4～3世紀、北九州に渡来した稲作が、温暖化に押されて西日本に広がり、農耕社会化が一気に進んだ。紀元前2～1世紀には北陸や関東に環濠集落も現れ、水耕農耕が広がっていったが、紀元後から寒冷期になり、奈良時代8世紀まで続いたといわれている（松木2009）。

上記から、仙台平野の稲作は当初200～300年は気候の温暖化に後押しされて、周辺の地域も次々に水田として開かれ、拡大していったらと思う。たとえ作柄が不良であっても耕作する面積を増やすことでカバー出来るし、また人口の増加が大きな要因であった可能性もある。しかしその後の寒冷期では、稲作の収量維持はかなり困難になり、耕作の中断、雑穀類の栽培に転換するなどに対応したと思われる。実際、津軽の垂柳遺跡は浅瀬石川の大氾濫で水田が土砂に埋まり、耕作を放棄し、奈良時代に再開されたという。補修に要する労力、当時の収穫量を判断した結果が耕作放棄だとすれば、気候の寒冷化という要因が大きかったのだろう。

#### 2) 弥生期の稲

弥生時代段階の稲作では野生の性質が残っ

ており、稲穂がこぼれやすく、又穂が実を結ぶ時期がずれるため、熟した穂から順次収穫するために、石包丁と木包丁による穂刈りが一般的であった。弥生期の代表的な遺跡である登呂遺跡の米については「出土米は大小不ぞろいどころでなく、いろいろの形がまちまちに入っており、その作柄もあまり良くない。」「ジャポニカタイプのコメは泥炭遺跡のような地形では発育がすなおではなく、又関東から以東、以北の土地にあわない」という所見もある。（直良1969）

稲刈りをした後の切り株から再び発芽する、ひこばえであるが、日本で栽培されているジャポニカ系の野生種は、元々根で繁殖する性質が強く、種子の生産性は余り高くなかったという。そのため、食料として栽培されるには、種子繁殖力が高くなる必要があり、それには気候の寒冷化や乾燥などの影響が考えられるという。イネは一年生作物で年一回の有性生殖（自家受粉でたくさんの品種を生み出しやすい）により、急速に進化し、環境の異なるさまざまな地域への伝播が容易になるという。（佐藤2002、2009）

以下で取り上げる早稲、晩稲といった品種への進化も稲のこの形質によると考えられる。

#### 3) 危険分散のための混作

狩猟採集で生計をたててきた人々が作物栽培を始めた一因には堅果類の不作を補てんする目的もあった。しかし自然は人知を超えている。古代から、農耕民は自然からの脅威・災害を避けるために、知恵と工夫を重ね、後世に伝承しながら、稲作の維持と改良を図ってきた。古代の水田耕作にも栽培のリスクを回避する発想があったであろうと、藤原宏志はネパールでの体験を綴っている。「予測しがたい自然の変化—寒冷な夏、少雨、台風の襲来—に対する対策として、混作により、多種類・多品種の作物をつくっておけば、たとえある作物が被害にあっても、別の作物あるいは品種が生き残ることになる。ネパールの

田圃のイネも出穂期にサイクロンが来れば、その品種は壊滅的打撃を受けるが、出穂期の異なる他の品種は難をまぬがれることができるわけだ。」(藤原、1998)

時代は律令期になるが、山形県遊佐町上高田遺跡、福島県いわき市荒田目条理遺跡などから、様々な種類の稲の品種を書いた木簡が見つかっている。これらの遺跡は稲作農耕にもっとも深く関与し、指導的役割を果たしたと考えられる郡司層の拠点地であると推定されている。この木簡は、産地での整理保管用の付札で、種粃1俵(1石入=5斗)ごとに、品種名+数量が記入されており、「畦越」「地蔵子」など江戸時代の農書に記されている品種もあり、この時代に栽培技術の改良が行なわれていたことが伺われる。多様な品種があるのは、①同一品種を同じ土地で連作することを回避すること。②田植・稲刈りの時期をずらし、労働力を確保すること。③風水害の被害を避けること。を目的としたと考えられる。郡ごとに早稲、中稲、晩稲の品種を統一して作付するが、更に早・中・晩稲それぞれに多様な品種を用意して、少しずつ時期をずらして作付していたようである(平川2006)。

江戸時代、伊勢へおかげまいりにいった百姓たちが道中、実りの良い稲穂や変わった品種の稲穂をしごきとり、持ち帰って自分の田で栽培を試していたと聞いたことがある。農耕民が昔から、機会をとらえては積極的に他所の工夫・成功例などの情報を集め、イネの改良に取り組んできた努力の積み重ねが現代の農業の基盤となっているのだ。何となく、農耕という営みには、その始原から、豊作への願望が内発的に働くような性向が備わってような気がする。

#### 4. 古墳・平安時代の食料資料

弥生時代後期から、一転寒冷期に入り、古代人の食生活がどう変化していったか、後世の出土資料から見てみよう(上野1992)。

古墳時代中期、南小泉遺跡(第13次—3号1C層—住居跡を切る溝)から検出された植物遺体155個の内訳は、オオムギ119(76.8%)、コムギ18(11.6%)、イネ10(6.5%)、リョクトウ(ヤブツルアズキ)4(2.6%)、アズキ1(4%)で、ムギの比率が高くなっている。ムギが主食で、粉にして食べたとされている(仙台市教委1985)。

平安時代末期の山口遺跡(2次—1号河川跡)では、316片の炭化種子のうち判別可能な個体数109ではアズキ(ないしツルアズキ)41.3%、リョクトウ(16.5%)、ダイズ(0.9%)、オオムギ(27.5%)、コムギ(2.8%)、イネ(11%)となっている(仙台市教委1981)。

平安時代前半期、名取市・清水遺跡の井戸から検出された植物種子の分析では、栽培種:アサ、ソバ、アズキ、モモ、ナスビ、マクワウリ、イネ、ムギ、アワ  
畑地雑草:タデ類、アカザ類、ハコベ類、カタバミ  
ドングリ類:オニグルミ、カシノキ、アカザ、サンショウ、トチノキ、ブドウ、マタタビ、キイチゴ、スモモ、ナシ  
となっており、後背湿地は水田として、自然堤防上は畠として土地が利用されていたようである(宮城県教委1981)。

山口遺跡の場合、イネが収穫時にこぼれたとの推測もでき、またコメが租税として厳しく管理されていたこと、また多く食されたことで残され方が少ないとの推測もできる。

とはいえ古墳期から平安末期にかけて、当時、この地の人びとは、食料としてムギ類、アズキなど耐寒性のある穀物を比較的多く食べていたのであろう。律令期の文献資料に、穀物類の栽培を奨励する布告が再三出されているが、コメの凶作時の対策のほか、これらの食物の必要性、又は嗜好があったのかもしれない。

また、ドングリなど堅果類の採集が縄文以

降も継続されてきたことは、水田稲作が伝来した佐賀県菜畑遺跡の遺物分析の例にもあるように、中世・近世はおろか、近代まで語り継がれてきた生活の知恵でもある。

仙台平野は江戸初期の新田開発以降、米どころとして、コメづくりに特化した農業社会となり、私たちもその思い込みが強いが、弥生期以降の農業は、地域の生態系・気象に適応した様々な作物が栽培された、決して水田稲作に特化した生業ではなかった、と思われる。

### Ⅲ. まとめ

#### 1) 稲作を上げたもの

「日本の初期稲作が、雑穀との複合農耕であったことは、菜畑遺跡や北白川追分町遺跡などでイネだけでなく、アワやキビが見つまっていることからあきらかです。(中略)そして、このイネと雑穀の栽培は、縄文時代から連綿と続くマメ栽培や堅果類、ベリー類の利用体系に徐々に加わっていったものであり、革命的に変化したわけではないと考えています」(工藤 2014)。

弥生期のコメ—稲作だけでなく、食住から祭祀までの文化総体を備えたコメ—が、北九州に定着し、その後西日本に普及していったことは、食料として、又交換材として、コメの有用性が受け入れられた証しであろう。当時食料資源があまり豊富でなく、緯度的に変わらない立地の西日本では、稲作の伝播がより容易であり、イネが食料に占める比重が高まるにつれて、生活様式も稲作中心に変遷していったと思われる。しかし仙台平野での稲作は、Ⅱ章でみたように、気候的に、地質的にイネ自身が遺伝的に適性を獲得するまで、多く時間と労力を要し、その恩恵が少ない分イネ社会化が余り進展しなかったといえる。

私的には、弥生期のコメは明治以降の稲作主義史観？ともいふべき見方から実態以上に評価され過ぎていると思われる。鉄が自前で

鍛造され、鉄製の加工用道具や鉄製の農耕具がつくられるようになった古墳時代以降、水耕稲作は普及、定着していったというのが妥当ではなかろうか。それにしても、古代の列島人がデンプン食料としてコメを受け入れたのはどうしてだろう。

「洪水の危機にさらされながらも、あえて低湿地に居住をうつし、また水田を開いていたのは、米は食物としてこれほど魅力のあるものはなかった。水さえあれば育ち、作りやすかった。また脱穀調整もヒエ、アワ、キビ、ムギなどに比べ楽であった」。農業の現場に通じた民俗学者宮本常一の何気ない言葉がいちばん腑に落ちるようだ(宮本 2012)。

#### 2) 宿題—稲作以前について

縄文後・晩期の遺跡からモミの圧痕や炭化したコメや雑穀などが見つかり、西日本で雑穀やイネの焼畑農耕が行なわれていたことはほぼ確実である。焼畑など畑作系のイネは熱帯ジャポニカが多く、宮崎県えびの市・桑田遺跡でみられるように縄文時代のイネに多いことがわかっている(藤原 1998)。

第3図は弥生時代のイネの遺伝子を調査したものであるが、13の遺跡から熱帯ジャポニカが検出され、地域的には九州以外のほとんどの地域に広がり、時間的には弥生時代の初めから後期までほぼ変わりなく、平安時代



第3図 弥生時代の遺跡から出土したイネの遺伝的性質 (佐藤 2002)

以前まで続いているという。この熱帯ジャポニカ種は中国にはあるが、朝鮮半島には存在せず、日本列島に野生イネが自生していない以上、朝鮮半島→北九州と言われる水田稲作ルートの外に、別ルートでイネが伝わってきたことを示唆している（佐藤 2002）。

水田稲作は、弥生早期に朝鮮半島から北九州に渡来した集団によって伝来したことは定説であるが、その渡来集団が畿内、東海を経て、仙台周辺まで進出・移住してきた可能性はあるのだろうか？

民俗学者である佐々木高明氏によれば、縄文時代から既に雑穀やイモ類が栽培されていたという前提があって、弥生期の水耕稲作が

スムーズに日本列島で受け入れられたという。

農耕の伝播、農耕技術が伝わるには、送り手側と受入れ側に、作物の栽培に関する知識・技術が共通して在ることが前提条件となる。果たしてそれはあったのか？

第4図によると、水稲以前の穀物の出土資料は九州を中心とする西日本と東北日本一より古い雑穀は北海道や東北の日本海側に集中している。縄文時代の北日本の穀物資料は、朝鮮半島経由の南廻りの伝播ではなく、シベリア・沿海州など北ルートでの伝播が考えられる。（寺沢 2000）青森県八戸市風張遺跡の炭化米についても、栽培の有無はさておき、雑穀と合わせて伝播されたものであり、更に敷衍すれば津軽平野周辺での弥生期稲作の展開も（伝来ルートは不問にして）縄文時代から、穀物農耕＝栽培管理することで、食料を収穫する生活が部分的に成立していたこと、その基盤があって出来たと考えられる。日本列島は人も文化も大陸、そして琉球列島から受入れ、形成されてきた。日本海を環状に囲む地域間の交流でも、半島経由の南ルートだけでなく、サハリン・沿海州の北ルートなど幾つかの伝来ルートがあったと想定される。今私たちが暮らす仙台の地には、西から押し寄せてきた大陸・半島文化をはじめ、北のアイヌ文化や南の琉球文化が、遺跡として、或は伝承された民俗として遺されているかもしれない。そんなことを夢想しながら、古代の遺跡・遺物を訪ね、観て、先祖の営みを考える、はじまりの一步としたい。

最後に、佐藤先生はじめ縄文の森ミュージアムの職員の方々、そして共に講義を聞き、遺跡を歩いた研修生の皆さん、いろいろお世話になりました。



第4図 縄文時代晩期前半以前の穀物の痕跡分布状況（寺沢 2002）

## 引用・参考文献

- 伊藤寿和 2005 「陸の生業」『列島の古代史ひと・もの・こと2 暮らしと生業』 岩波書店
- 上野秀一 1992 「本州文化の受容と農耕文化の成立」『新版古代の日本9 東北・北海道』 角川書店
- 工藤雅樹 1998 『古代蝦夷の考古学』 吉川弘文館
- 工藤雄一郎 2014 『縄文人の植物利用』 新泉社
- 佐藤洋一郎 2002 『稲の日本史』 角川書店
- 佐藤洋一郎 2009 「ユーラシア農耕史試論」『ユーラシア農耕史1 モンスーン農耕圏の人びとと植物』 臨川書店
- 設楽博己 2005 「東日本農耕文化の形成と北方文化」『先史日本を復元する4 稲作伝来』 岩波書店
- 仙台市 1995 『仙台市史 特別編2 考古資料』 仙台市市史編さん委員会
- 仙台市教育委員会 1981 『富沢水田遺跡調査報告書』（1次）
- 仙台市教育委員会 1991 『富沢遺跡30次発掘調査報告書』
- 仙台市今日言う委員会 1991 『富沢遺跡35次発掘調査報告書』
- 仙台市教育委員会 1985 『南小泉遺跡発掘調査報告書』
- 仙台市教育委員会 1981 『山口遺跡発掘調査報告書』
- 仙台市教育委員会 1993 『仙台市文化財パンフレット34 集米作りをはじめた人々—弥生時代』
- 寺沢 薫 2000 『日本の歴史02 王権の誕生』 講談社
- 直良信夫 1969 「古代の米」『稲の日本史（上）』 柳田国男著 筑摩書房
- 禰宜田佳男 2000 「稲作の始まり」『古代史の論点1 環境と食料生産』 小学館
- 平川 南 2006 「古代国家と稲」『東大駒場連続講義 歴史をどう書くか』 講談社
- 藤原宏志 1998 『稲作の起源を探る』 岩波書店
- 松木武彦 2009 『進化考古学の大冒険』 新潮社
- 宮本常一 2012 『飢餓からの脱出—生業の発展と分化—』 八坂書房
- 宮城県教育委員会 1981 「清水遺跡」『第77集 東北新幹線関係保存遺跡調査報告書V』

# カミサマを探して

古河佳子

## I. はじめに

『苦しいときの神頼み』というのは私に限らず皆さんも経験していることでしょう。日本人はよく『無宗教』といわれてしまいますが、多くの日本人が正月に初詣に神社に行って頭を下げ、お墓や仏壇の前で手をあわせませす。神道も仏教もキリスト教でさえも年中行事として取り込んでしまう日本人。いったい何者なのだと他の国の方には不思議でしょう。都合よすぎかも、と日本人の私もふと思ってしまうことがあるのですがどうでしょうか。そこで今の日本人を考えるために、昔からの考え方や信仰はどういうものか考えたいと思います。とはいえ宗教学や心理学の専門的なことはわかりませんので、単純に昔の人にとってのカミサマがどういうものでどんなお願いをしてきたかということに焦点を絞って考えてみます。というわけで『カミサマ』を探せ、をはじめます。

## II. 成果

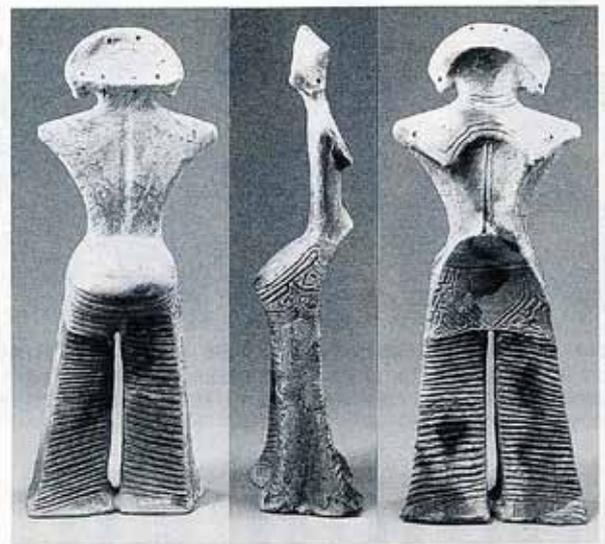
### 1. 文献にある『カミサマ』

過去のなかでカミサマについて書かれた一番古いものは今から 1,300 年ほど前に書かれた『古事記』『日本書紀』になります。最近週刊誌として『古事記』が出てきましたので内容をご存知の方もいらっしゃるでしょう。よく 2 つあわせて『記紀』と省略される書物はどちらも神代の時代から書かれていますので、カミサマを見つけるのは簡単です。ちなみに『古事記』の中には 300 を越えるカミサマが登場し、最初に現れた神様というのは「天之御中主神」「高御産巢日神」「神産単日神」の 3 柱（カミサマは“ 3 人”ではなく“ 3 柱”と数える）と記載されています。

ではこの 3 柱が昔の日本人が願いごとをしたカミサマかといえば違うと思います。そもそも『記紀』は日本が国家体制を築く上で作らせた書物で当時の天皇統治を正当化するようなどころがあります。各地の言い伝えや伝説のようなものを基にした作り話的な要素がありますので実際に当時の方がお願いしたかは怪しいです。とはいえ作り話も基となるものがあるでしょうから、ここから読み取れる事実もあるでしょう。実際江戸時代の本居宣長、現代でも多くの専門家が研究されています。

### 2. 形ある『カミサマ』

ではもっと古いものでカミサマと考えたとき、私は土偶を思いつきました。山形県立博物館に『縄文の女神』という土偶があり、見学にいったことがあります。高さ 45 cm の立体的なもので胸やお尻が強調されており、実際に見るとなかなかナイスプロポーションです。横から見るとさらによく分かり、女神



第 1 図 縄文の女神（山形県西ノ前遺跡）

と名づけたくなる気持ちがわかります。

土偶というのは、調理具としての土器や狩猟具としての石鏃・石槍などといった生活に直結して使用されたものと違い、見た目には使い方は分からないが精神や祭祀のために必要だったという、いわゆる『第二の道具』と呼ばれるものの代表格です（小林 1996）。今から 13,000 年ほど前の縄文時代の始まりである草創期からすでに存在していたようで、一万年以上という長い縄文時代ですべて使われていました。出土するほぼすべてが女性を表しており、多くは破壊されたようにバラバラで出てきています。

では土偶は本当にカミサマかという、専門家ではいろいろ意見が分かれているようです。一つは女神とみる説。女性を表現しているからでしょうが、今は地母神として考えられることが多いようです（渡辺 2013）。多くの動植物をはぐくむ大地は妊娠する女性と同じと見立てられ女神とされています。その女神を土偶が表しているとのことですが、ではなぜバラバラに壊されているのでしょうか。その答えは『記紀』に出てくる女神であるイザナミ・オオゲツヒメノカミ・ウケモチノカミの話が参考になると言われています。この3柱の共通点は、自らの死を機に食物をはじめ農耕・畜産にかかわる動物といった人間が生きていく上で必要なものを次々に生んでいます。この話は世界の神話学にあるハイヌウェレ型神話と言われています（渡辺 2013）。ハイヌウェレはココナシの花から生まれ、殺された後死体からさまざまな食物が生まれてきたという東南アジアの古い言い伝えです。つまり女神が死ぬと豊かさをもたらされるために、女神を模した土偶を破壊することで死を表現したと考えられているようです（渡辺 2013）。

別の考えでは土偶は精霊と考えられています。狩猟・採取・漁撈にて食べ物を確保していた縄文時代の人々にとって自然からの影響

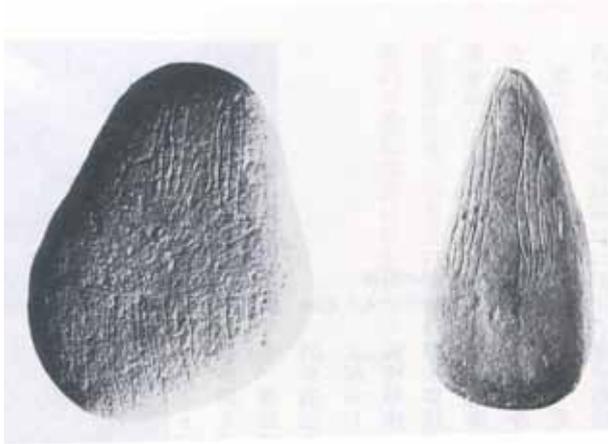
というのは非常に大きなものでした。木や石や土や水すべての自然に精霊が宿っているというアニミズムという考えがあったようで、自分たちが平穏に過ごすために大切にしていました。そんな自然の精霊や霊力が土偶に宿っており力を授かろうとしたようです。そのため土偶の顔ははっきり作られずあいまいだったり表情がなかったりしているとも言われています。確かに「縄文の女神」も顔面部分は点になっていて表情があいまいです。

さらに別の見方として死んだ祖先に見立てる祖先神像とも言われています。哲学者である梅原猛氏は三内丸山遺跡で見つかった十字型の土偶が悲痛な表情をしており下半身に産道があるの表現していることから、死んだ妊婦を表しているのではないかと言われています。東北歴史博物館の「日本発掘」で実際十字型土偶を見ましたが、どうでしょう。私にはそう思えないですが。

土偶よりさらに昔のカミサマを探すと、実は縄文時代草創期からの岩偶というものがあります。大分県岩戸遺跡から見つかったコケシ形で彫られたものや愛媛県上黒岩洞穴からの女神石といわれる石に女神を表す線が刻まれているものが発見されています。これらの石偶も女性を表しているため土偶も含め世界中で発見されているビーナス像と判断されています。



第2図 大型板状土偶（青森県三内丸山遺跡）



第3図 線刻磔（愛媛県上黒岩洞窟）

ただこれらのものは結論的に何を表現しているものかわかっておらず、カミサマかそうでないかも決定することは今のところできません。しかし普通の人とは違うなにかをイメージしてなにかしらの願いをするものだったのは間違いないと思います。

### 3. 『カミサマ』にお願いすること

ところで土偶や石偶に昔の人は何を願っていたのでしょうか。一般的に女性を表現しているため安産・多産を祈願したと言われていいます。また故意に壊すことによって傷や病気を転移させて治療を祈願したとも言われています。さらに地母神の見方から豊饒を祈ったとも言われています。どちらにせよ生きることにつながる願いです。

宮城県東松島市宮戸島に里浜貝塚という場所があります。強風にあおられながら最寄駅である野蒜から5 km以上、復興工事中の脇をひたすら歩いて着いた小さな島は自然豊かな見晴らしのよいところでした。もちろん縄文時代に比べると自然豊かとはいえませんが、多くの島が浮かぶ松島湾を見ながら同時に思いをめぐらせてみました。海で様々な魚や貝を漁撈して、山では木の実等の採取や動物狩猟ができるこの場所は食べ物が豊富でさぞかし住みやすかったでしょう。そのためこのあたりには縄文前期から数千年におよんで生活した村があったとされています。ただし常に

気候が安定していたわけではなく、私が行った日と同じように冬は強風が吹き荒れ、海は大荒れる厳しい状況だったでしょう。また地震がおき、津波がくれば一瞬で大きなダメージを受けたに違いありません。さらにひとたび異常気象で豊かなめぐみたちに影響があると食べ物の確保が難しくなります。豊かだけど自然の厳しさに常にさらされる生活、そこで生き抜くのは現代の私たちと比べると大変だったと容易に判断できます。縄文時代の平均寿命がおよそ31歳だったといわれるところからも想像できます（渡辺 2013）。だからこそ生きることに對する願いが強かったと思われま

す。別の視点から見ることがあります。貝塚はゴミ捨て場のように見られがちですが、実は埋葬された人が見つかったりしています。ゴミ捨て場に人を埋めたのか、と思いがちですが、そうではないのです。そもそも貝塚は霊を送る場所のようで、人だけでなく食べた貝も魚の骨もイノシシの骨も使い終わった土器さえもすべて恵みに感謝をし、また再び戻って新たな恵みになるよう願ったようです。人もまた死んだら再び戻るといふ自然回帰な考えがあったようで、例えば子供が幼くして死んでしまうと甕棺に入れてその母親が生活するすぐ近くに埋めているのも、早く母親の中に戻ってもう一度生まれてくるよう祈られたためといわれています（梅原 1995）。

### III. まとめ

日本列島は四季折々の変化があつて比較的気候に恵まれており、過ごしやすい土地だといえますが、例えば年に数回くる台風や大雪、また数十年単位である地震や火山噴火など、驚異的事態にさらされる危険な地域ともいえるでしょう。その恐れる事態から何とか生き延びるため人知を超えた存在、『カミサマ』に願いつづけたのだと思います。このあと大陸からやってくる仏教や異国の神キリスト教

を受け入れたのも生きるために願うことが必要だったからなのではないでしょうか。現代のように何でもかんでも『カミサマ』に願うのではなく、自然の中での生と死に向かう姿勢が『カミサマに祈る』ことだったと私は思います。

そしてこの考えから、この後日本人の歴史

が続いていく、そう感じながら今後の自身の課題に向かっていこうと思います。

#### 参考文献

- 梅原猛・安田喜憲 1995 『縄文文明の発見 驚異の三内丸山遺跡』 PHP 研究所  
上黒岩岩陰遺跡考古館 HP  
久保田展弘 2008 『現日本の精神風土』 NTT 出版  
小林達雄 1996 『縄文人の世界』 朝日新聞社  
小林達雄 1999 『縄文人の文化力』 新書館  
小林達雄 2008 『縄文の思考』 筑摩書房  
三橋健・白山芳太郎 2005 『日本神さま事典』 大法輪閣  
渡辺 誠 2013 『よみがえる縄文の女神』 学研パブリッシング

## 市民文化財研究員活動報告書 19

発行日 平成27(2015)年3月31日  
発行 仙台市教育委員会  
編集 公益財団法人 仙台市市民文化事業団  
仙台市富沢遺跡保存館(地底の森ミュージアム)  
〒982-0012 仙台市太白区長町南4-3-1  
TEL 022-246-9153